

第11回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21656>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 11, 1986-11-10. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：



第11回合宿共同授業を顧みて

九州大学教養部長 立 田 清 朗

昭和61年度の九州地区国立大学間合宿共同授業は、初めて沖縄県渡嘉敷村にある国立沖縄青年の家で実施された。前年秋に、過去10回の合宿共同授業の総決算の意味もあり、また新たな出発のため、第11回合宿共同授業を沖縄地区で開催してはという提案をしたところ、琉球大学教養部長、仲宗根先生に快諾をいただいた。企画段階から、主管校の責任者としては、九州本土の各大学から沖縄へ教職員・学生をどのようにして送るか、また予算面はどうなるかなど、内心一抹の不安は拭い切れなかった。さらに、これまで2分校制であったが、1分校80名の学生で実施してきたさいにも、かなり運営には気を使ったが、教職員・学生総数200名を越える規模ではどのように運営できるであろうかとの心配もあった。

琉球大学関係者の努力により、企画、準備が一切ととのって、いざ学生が鹿児島港へ向けて出発という日になり、沖縄へ台風接近という情報が入った。もともと「台風だけはどうにもなりませんよ」と琉大の方々から聞いていたものの、果たして沖縄行の船は出るのか、渡嘉敷へ渡れるであろうかと不安はつり、前途多難を思わせた。しかし、幸いなことに、わずか一日の期間短縮で、若干過密スケジュールにはなったものの、全スケジュールは無事に消化された。

私は後半の海洋研修、懇親会および全体討議に参加することができた。全体としての問題点および反省すべき点については校長やオーガナイザーの先生方より述べられることと思うが、私なりの感想のいくつかを述べてみたい。

学生には講義回数が多いこと、討論時間が充分でないこと、さらに自由時間が少なく他大学の学生との交流ができないなど全体的に過密スケジュールであるという不満はあったようである。これらのことは毎年聞く不満であり、学生がどのような目的で合宿共同授業に参加したかということにも問題がある。しかし、企画する側にとっても、単位認定のために必要な授業回数と期間とのバランスについては今後の検討課題となるだろう。

今回の特色の一つは渡嘉敷村からの協力であろう。初日には村民からの歓迎の催しがあったと聞いているし、最後の夜の懇親会にも多数の村の方々がみえられた。しかし、学生と村民との間にどのような交流があっただろうか。大学生はお互同志の交流に閉じこもるだけでなく、可能な限り地域住民との交流機会をとらえ、社会構成員の一人としての自覚と見識を養う必要があるだろう。もう一つはキャンプファイヤーが取り入れられたことである。これまでの合宿共同授業では、キャンプファイヤーは行なわれなかった。学生にとって合宿の実をあげ、お互の絆を強め合うのにキャンプファイヤー

は有益な催しの一つであり、そのメリットは充分にあると考えていた。今回、キャンプファイヤーを中心とする懇親会において、学生の歓喜の姿には圧倒されんばかりであり、その満足感は私にも感じられた。ただ、全体を通して、大学側の集りにこだわらず広く相互に溶け合った企画を中心に行われればもっと素晴らしいものとなったであろう。いづれにしても、今回の合宿共同授業によって、講義・討論だけでなく、地域との交流集会やキャンプファイヤーなどを取り入れた企画は今後の合宿共同授業を活性化するための新しい方向を見出す試みであったと思われる。

最後に、第11回合宿共同授業の実施にあたり、渡嘉敷村および国立青年の家内田所長さんをはじめ職員の方々の施設利用に対する御好意と御協力に深く感謝の意を表します。また、琉球大学仲宗根教養部長、オーガナイザー彌益教授をはじめ教職員の方々の企画、運営に対する献身的な労に、さらに各講師の方々の御協力に篤く御礼を申し上げます。

琉球大学教養部長 仲宗根 勇

昭和61年度九州地区国立大学間合宿共同授業は、7月17日から7月21日までの間、国立沖縄青年の家で実施され、事故もなく無事終了することができた。主管校の九州大学をはじめ参加各大学、とくに参加された関係教官、事務官そして参加学生諸君の御協力に対して、当番校の責任者として厚く御礼申し上げたい。

また、台風という人為ではどうしようもない自然の猛威に対して、只只祈るしかないような状況下で、実施に対処しなければならぬような事は、共同授業が始まって以来の事であったが、半日遅れただけで、予定された日程をこなし得たのは誠に幸いなことであった。台風の中を慎重にそして果敢に船を出したこと、安謝港での乗船に特別に配慮して頂いた事等がその後の活動を順調なものにしてくれた。いろいろな御配慮、御協力を下さった方々、とくに実施施設の国立沖縄青年の家、渡嘉敷村、船会社その他の地元関係者の方々にもここに改めて感謝の意を表したい。

台風一過、その後の講義、討論、フォーラムはもとより海洋研修における無事故、キャンプファイヤーの盛り上がり等無事にスケジュールを消化し得た事を参加者、関係者とともに喜びたいと思う。

ところで、授業が、スケジュール通り進行したことは、今回の共同授業の評価の項目であっても全体そして内容に触れる評価でないのは明らかである。評価の本体は、学生が、この授業をどう受けとめ、将来に向けて如何に活用していくことができるかということであろう。すなわち実施する側、あるいは教官の側からすれば、講義を通して、または討論・討議によって、さらに合宿という共同生活の場におけるいろいろな実践を介して、自らの意図したものが、はたして学生に伝えられ、理解され、将来の成長の糧として貯えられたかどうか大事な点であろう。これについては今後の評価にまつしかないのかもしれない。

今回の授業は、メインテーマを「地域の視点から」とした。これは、自らの足元を見つめることから、世界を広く見て行くという問題設定であった。諸先生による講義、討論、フォーラムは、一貫性のある充実したものであったと思う。地域の自然、社会、文化等を総合した、正に多面的な授業が進められたのであるが、学生の授業を受ける態度とか、全体としての共同授業の受けとめ方については、毎年度指摘されている事が、今年度についてもあてはまるであろう。参考書による予習や、より真剣な受講態度が望まれるし、学生が主たる目的に据えたがる親睦とか学生間の交流等よりは、共同授業が主目的である事を自覚すべきだということである。

過去10回まで、当番校としての責任を負うことなく参加させて頂いた琉球大学が、御礼の意味を含めて当番校としての責任を引き受けた今回の共同授業は、いろいろな点で従来のそれとは相異するところがあった。九重、島原での2分校実施を、国立沖縄青年の家での1分校、しかも参加学生総数を大幅に増加させて実施したこと、登山研修が海洋研修になったこと、フォーラム実施の責任が当番校である琉球大学に任されたことなどである。その他にも地域の人々と、授業参加者との交歓会を、地域と大学の接点を求める小さな試みとして予定表の中に織りこんであったこともある。これらの諸点は、常に指摘されている日程の厳しさと共に今後評価検討事項となるであろうが、とくに2分校制と1分校制、1分校における適正な参加人員、実施場所、実施時期等、引続いて検討されねばならないと思われる。

1. 第11回九州地区国立大学間合宿共同授業 実施要項

1. 目 的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。

2. メインテーマ 「地域の視点から」

3. 主 管 九州大学教養部

4. 会 場 国立沖縄青年の家
(当番：琉球大学)

沖縄県島尻郡渡嘉敷村〈TEL 098987-2110〉

5. 開 催 期 日 昭和61年7月16日(水)～7月21日(月)の5泊6日

6. 参 加 資 格 九州地区国立大学に在籍する学生(教養部を置く大学においては教養部学生)で当該大学が指定する者

7. 募 集 人 員

福岡教育大学	5 人
九州大学	30
九州芸術工科大学	10
九州工業大学	5
佐賀大学	20
長崎大学	10
熊本大学	10
大分大学	10
宮崎大学	5
宮崎医科大学	5
鹿児島大学	20
琉球大学	80
計	210

8. 日 程 別紙日程表の通り

9. 講義・フォーラム、海洋研修 題目と講師

Aコース

講義

- | | | |
|-------------------------------|-------------|-------|
| (1)「地球物理学的にみた九州の特徴」 | 佐賀大学助教授 | 鈴木 亮 |
| (2)「環〈東海〉の言語学」 | 鹿児島大学助教授 | 崎村 弘文 |
| (3)「沖縄の文学」
—とくに沖縄近代詩を中心に— | 琉球大学教授 | 岡本 恵徳 |
| (4)「地域開発」 | 九州芸術工科大学助教授 | 三上 禮次 |
| (5)「都市化と水」 | 熊本大学教授 | 高橋 俊正 |
| (6)「地域と民俗」
—稲と日本人— | 長崎大学講師 | 福島 邦夫 |
| (7)「地域と教育」
—筑豊・地域づくりの教育試論— | 福岡教育大学教授 | 林 正登 |
| (8)「平和意識の地域比較」 | 九州大学助教授 | 高田 和夫 |

Bコース

講義

- | | | |
|-------------------------------------|----------|--------|
| (1)「世界の海、地域の海」
—化学成分からみた海洋水と沿岸水— | 大分大学助教授 | 川野 田実夫 |
| (2)「亜熱帯地域の自然環境」
—サンゴ礁の発達史— | 琉球大学教授 | 古川 博恭 |
| (3)「地域開発における工業立地の意義と限界」 | 九州工業大学教授 | 原田 統之介 |
| (4)「地方文学の発生」
—日米における比較— | 宮崎大学助教授 | 岡林 稔 |
| (5)「地域と住宅」 | 九州大学助教授 | 小山 紘三 |
| (6)「魯迅における伝統と現実主義」 | 佐賀大学助教授 | 高橋 繁樹 |
| (7)「障害児とコミュニティ心理学」 | 鹿児島大学助教授 | 平川 忠敏 |
| (8)「地域方言と共通語」 | 九州大学助教授 | 陣内 正敬 |

フォーラム（A・B合同とする）

「地域の可能性を求めて」—沖縄の視点から—

基調発題者：琉球大学名誉教授	池原 貞雄
琉球大学助教授	池田 孝之
琉球大学教授	比屋根 照夫
沖縄タイムス論説委員	川満 信一
司会者：琉球大学教授	森田 孟進
琉球大学教授	鵜飼 照喜

海洋研修（A・B合同とする）

指 導 者：琉 球 大 学 教 授	池 田 交 優
琉 球 大 学 助 教 授	浜 元 盛 正
琉 球 大 学 講 師	松 野 義 雄
琉 球 大 学 講 師	宮 元 章 次
琉 球 大 学 助 手	高 倉 実
国立沖縄青年の家専門職員	未 定

10. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費（13,000円）を添えて申し込むこと。
ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。
- (2) 当該大学は参加学生の名簿、泳力調査表及び教職員滞在等計画書を5月31日（土）までに、参加学生の健康診断書を6月10日（火）までに、琉球大学あてに送付すること。
- (3) 参加費は、大学毎に一括して7月16日に会場において払い込むこと。

11. 参加費

13,000円 「青年の家」の費用（7月16日夕食から7月21日昼食まで）及び一部のバス代、交歓会費

〔注〕その他の所要経費 9,000円～10,000円

〔内 訳〕 食費 7,000円（@700×10食分）

雑費 3,000円

なお、7月21日（月）の那覇での宿泊は船中泊（ごーでんおきなわ）となる。

12. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは、各大学の判断において行う。

ただし、認定することのできる単位数は2単位までとする。

13. その他

- (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、運動靴（履きなれたもの）、帽子、水泳着、水泳帽、日焼け止めクリーム、水中めがね、ゴムズリ、雨具、ジーパン（女子）、体育館シューズ、健康保険証（コピー）、日常使いなれた薬、水筒、長袖シャツなど。
- (2) 集 合 参加者は、各大学毎にまとまって、7月16日（水）午後4時30分までに会場に集合すること。
- (3) 解 散 解散は各大学へ帰着後行うのを原則とするので、参加者は借上の船舶及びバスで各大学まで輸送する。

なお、個人的な事情があり、かつ、所定の手続きを経た者については現地解散を認めることがある。

14. 海洋研修上の留意事項

1. 健康診断書は各大学でとりまとめて当番校（琉大）に提出すること。

（異常のある者は、事前に申しでること。）

※特に心臓、てんかん、脳貧血、高血圧、けいれんしやすい者、目、鼻等の病気の者。

2. 泳力調査実施・・・（泳げる・泳げない）

泳げる者について

平 泳 ぎ・・・約	M	} 沖の方へ泳ぎ出る グループの予備調査
横 泳 ぎ・・・約	M	
ク ロ ール・・・約	M	
背 泳 ぎ・・・約	M	
バタフライ・・・約	M	
ド ル ー 平・・・約	M	
そ の 他・・・約	M	

3. 各グループごと規律ある行動をとること。

(1) バディー「Buddy」仲間、同僚で行動、泳ぐこと。

- ・ 1人で勝手に泳がない。
- ・ 「バディー」と呼ばれたら両手を握りあって上にあげる。
- ・ グループからはずれる時は、バディーか指導者に連絡する事。
- ・ あまり沖へ泳ぎ出ない。「帰りは往きの2倍の体力を消耗する」
- ・ 水泳中に悪ふざけはしない。特に大きな悲鳴とか、「助けてくれ」などと冗談にも呼ぶなどしない。
- ・ 体調が悪くなったらすぐ連絡して休む事。
- ・ 準備運動の実施。
- ・ 足先から頭まで水をかけ、身体をならしてから泳ぐ事。

(2) 入水前後に人員点呼があるので動作を機敏にする。

4. 怪我や病気の救急法について

- (1) 耳に水が入った時
- (2) 目が赤くなった時
- (3) 陽やけ防止
- (4) 蜂や蚊に刺された時
- (5) 毒くらげに刺された時
- (6) 寒冷じんましん

※以上の事は当日、口頭で指導する。

5. 海洋研修上の所持品

- (1) 水泳着、水泳帽、日焼止クリーム、水中メガネ。

第11回 九州地区国立大学間合宿共同授業 日程表 (台風8号のため変更されたもの) Aコース

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
	7月15日(火)											乗船 鹿児島新港	18:00 出港	(ごーでんおきなわ) 船中オリエンテーション		
第一日目	7月15日(火)											乗船 鹿児島新港	18:00 出港	(ごーでんおきなわ) 船中オリエンテーション		
第二日目	7月16日(水)	船中 那(安)鵜(新)港										船中泊				
第三日目	7月17日(木)	朝清のつどい帰	朝食	講義(3) 「地域と民俗(稲と日本人)」 長大 福島教官	船中 (第一けらま丸)	移動(バス)	受付 オリエンテーション	昼食	講義(1) 「地球物理学的にみた九州の特徴」 佐大 鈴木教官	休憩	講義(2) 「環(東海)の言語学」 鹿大 崎村教官	自由・打合せ	入浴	交歓会	自由	消灯・就寝
第四日目	7月18日(金)	起床・洗面	朝清のつどい帰	朝食	講義(4) 「地域開発」 芸工大 三上教官	講義(3) 「地域と民俗(稲と日本人)」 長大 福島教官	休息	昼食	講義(1) 「地球物理学的にみた九州の特徴」 佐大 鈴木教官	休憩	講義(2) 「環(東海)の言語学」 鹿大 崎村教官	自由・打合せ	夕食	講義についての討議I	自由	消灯・就寝
第五日目	7月19日(土)	起床・洗面	朝清のつどい帰	朝食	講義(5) 「沖縄の文学(とくに沖縄近代詩を中心に)」 琉大 岡本教官	講義(4) 「地域開発」 芸工大 三上教官	休息	昼食	講義(1) 「地球物理学的にみた九州の特徴」 佐大 鈴木教官	休憩	講義(2) 「環(東海)の言語学」 鹿大 崎村教官	自由・打合せ	夕食	自由討議	自由	消灯・就寝
第六日目	7月20日(日)	起床・洗面	朝清のつどい帰	朝食	講義(6) 「都市化と水」 熊大 高橋教官	講義(5) 「沖縄の文学(とくに沖縄近代詩を中心に)」 琉大 岡本教官	休息	昼食	講義(1) 「地球物理学的にみた九州の特徴」 佐大 鈴木教官	休憩	講義(2) 「環(東海)の言語学」 鹿大 崎村教官	自由・打合せ	入浴	懇親会 (キャンプファイヤー)	移動(バス)	消灯・就寝
第七日目	7月21日(月)	起床・洗面	朝清のつどい帰	朝食	講義(7) 「平和意識の地域比較」 九大 高田教官	講義(6) 「都市化と水」 熊大 高橋教官	休息	昼食	講義(1) 「地球物理学的にみた九州の特徴」 佐大 鈴木教官	休憩	講義(2) 「環(東海)の言語学」 鹿大 崎村教官	自由・打合せ	入浴	懇親会 (キャンプファイヤー)	移動(バス)	消灯・就寝
第八日目	7月22日(火)	起床・洗面	朝清のつどい帰	朝食	全体討議	移動(バス)	移動(バス)	船中 (第一けらま丸)	見学 (南部戦跡めぐり)	着 那(安)鵜(新)港	船中泊					
第九日目	7月23日(水)	船中	7:30 鹿児島新港 着													

※当初計画分の日程表は巻末付録参照のこと。

九州地区国立大学間合宿共同授業
第11回

※当初計画分の日程表は巻末付録参照のこと。

2. 第11回九州地区国立大学間合宿共同授業 講義要旨

A コース

① 地球物理学的に見た九州の特徴

鈴木 亮 (佐賀大学)

一口に地球物理学といっても範囲が広いので、今回は九州の特徴として種々の現象を羅列することになろう。しかし、各現象とももとをたどると地球規模の第一原因があって、その局所的効果が九州に現われているものが多い。たとえば、九州は台風銀座と言われるが、台風の進路を決めるのは東アジアと西太平洋の気圧配置、それと偏西風である。日本でも最大規模の有明海の潮汐変動の直接原因は地形の影響だろうが、潮汐自体は全世界的現象である。地球内部のことは近頃はたいていプレートテクトニクスという学問で片がつく。板（プレート）状となって地殻が動いているとするその板は、遠い大洋の中に湧き出し口を持っている。地震も火山もその結果である。このように見ると九州も地球の一地域にすぎない。

今回のテーマを一冊でカバーする参考書はないので、広く基礎知識を身につけてもらう意味で名著と言われる一冊を上げた。(参考書一覧表参照)

② 環〈東海〉の言語学

崎 村 弘 文 (鹿児島大学)

われわれの住む九州・琉球地域の言語は、日本語諸方言の中に在って中央語との相異の著しいものとして知られている。

その相異は、われわれの言語が、一面において日本語の非常に古い様相を保存し、また他の一面においてごく新しい変化を起こしていることから生じたものである。

では、そうした保存・変化の傾向そのものは、どのような背景から生じて来たものであろうか？

東海＝〈東シナ海〉＝周辺の諸言語について知ることは、その問題解明の手がかりを得る上で重要であり、ひいては、いまだ系統不明の日本語の成立につき示唆を得る上でも甚だ重要なことである。この講義では、東海周辺の人と言語の様相を通時的・共時的に把えつつ、われわれの地域の性格を考

えて行きたいと思う。

③ 地域と民俗

——稲と日本人——

福 島 邦 夫（長崎大学）

国際化の時代を迎え、日本人論は今後ますます盛んになるであろうと思われる。日本人のルーツを求めて数十年前、九州から沖縄へと丁度、我々と同じように遡っていったのが柳田国男である。我々日本人の祖先が島づいたいに日本列島に渡ってきたという『海上の道』に著された柳田説は多くの批判を受けているが、その中で扱われている米（稲）の問題は未だに我々の精神生活に大きな影響を与えている。各地の祭りや日本の宗教の中にこの稲の祭儀の問題を見、日本人がどのように自分達の生を考えてきたのかということを考える試みをしたい。九州及び沖縄はこの稲の問題を考えるためには良い環境といえる。また、旅は民俗学の方法でもあるので、諸君が目で見、歩いて感じたものをどうとらえるかという問題に対して一つの参考にして頂ければ幸いである。

④ 地域開発

三 上 禮 次（九州芸術工科大学）

1. 日本の戦後国土開発計画の特徴と経過

a 三全総までの国土開発計画の諸特徴

- (1) 需要造出政策として
- (2) 産業基盤的社會資本への傾斜
- (3) 過剰投資傾向

b 三全総までの国土開発計画の開発手法と資本蓄積パターン

- (1) 戦後期、傾斜生産方式と電源開発
- (2) 高度成長前半期と一全総、拠点開発方式
- (3) 高度成長後半期と二全総、ネットワーク方式
- (4) 第一次オイルショック後の世界不況と三全総、定住圏構想

2. 四全総と地域開発

- (1) 四全総のキーワード、三全総フォローアップ作業、21世紀シリーズ
- (2) 単一拠点方式
- (3) 地方自立と民活

⑤ 沖縄の近代文学

岡 本 恵 徳（琉球大学）

沖縄の近代文学は、日本のなかでも、特異な歩みを示している。これは、沖縄の近代がはるかにおくれて始まったことによる。が、そればかりでなく、沖縄の文化と歴史の特異性が、それを決定づけた。そこで、ここではまず、①沖縄の文化の特異性、②沖縄の歴史について解説を行う。さらにそれらをふまえて、③沖縄の言後の独自性について理解させる。以上の理解をふまえて、本論である沖縄の近代文学の基本的な性格について講義を行う。そのなかでも、沖縄の近代文学の特質として、①近代文学を成立させるための根本的な要因である。共通語の習得がまず必要であった。従って共通語に習熟した若い知識人がそれを担うことになった。②沖縄の近代化がおくれて始まったために、近代化への希求が一層激しくなった。時には焦燥を伴うものになった。③近代化が国家統一と重なったために、異質の文化を担う沖縄の近代化は、同一化の方向で進み、沖縄の文化の特質を自ら否定する形で、文学活動を行った。以上のような沖縄の近代化の諸特質がそのまま、近代沖縄の文学作品に反映していることを、作品を紹介しながら、理解させることにする。

⑥ 都市化と水

高 橋 俊 正（熊本大学）

明治以後、河道の直線化や高水工事が推進されてきたが、これは、水害の起って当然の場所であるはんらん原に都市が進出したため、水害に備える必要が生じたことによる。また、都市化の進行に伴う地面の被覆によって土地の保水力が失われた結果、都市は降水を改修された河川を通じてできるだけ早く海へ流す構造をとるようになっていった。一方、都市は大量の水を必要としているが、足元の水だけではまかなうことができず、他に求めている。

こうした矛盾をかかえた都市の水問題を根本的に解決するには困難が多い。しかし、改善にむけて一歩踏み出す時期になっている。九州においても都市化の波が押し寄せている今日、快適な都市環境

を築くために、我々と水との関係がどうあるべきかを考えてみたい。

⑦ 地域と教育

——筑豊・地域づくりの教育試論——

林 正 登（福岡教育大学）

1. かつて産炭地筑豊の開発史の中で、どのような筑豊の地域教育史が展開したかを、2・3の例を引き合いに説明する。
2. 「地域づくり・ムラおこし運動」を論じた某新聞の社説の中に、最近市町村の顔付きが変わってきた、それが建築業者から文化人の柔和なものになってきたという話があった。この論旨は地域おこしのための発想や創意の大切さを説き、また地域の個性や「らしさ」の発見のためには、住民が今一度地域の自然環境、歴史や風土を見直さねばならないことを示唆している。
3. 地域おこしの核は人間教育だから、学校が地域社会に根付かねばならない。この課題のためには、先ず教師集団が地域の歴史や伝統、自然環境、風土から経済産業基盤までを理解しておく必要がある。今日までのこのような地域教材おこし、学校の社会化の理論を紹介する。すなわち、学校ごと聞き取りなどフィールド・ワークや住民との交流を行ない地域の意義や問題を教育目的観と学力観の中へ十分位置づけておかねばならない。

⑧ 平和意識の地域比較

高 田 和 夫（九州大学）

少し前になるが、1982年度に何人かの専門を異にする研究者と「沖縄・長崎における平和問題の理論的・実態的研究」をテーマにして、両地区及び福岡の7大学学生の平和意識調査を行なったことがある。そこには、勿論、内外の状況が平和問題に対する関心を高めざるをえない事情がはたらいていたことはたしかである。今回の講義では、平和学（ないし平和研究）が現代における平和のあり方についてどのように対応しようとしているかに触れながら、上記の平和意識調査にあらわれた特徴を紹介してみたい。その際、各地区における諸特性にも言及したい。これらの特徴や特性は、逆に、現在における「平和」状況を示すことになるであろう。

B コー ス

① 世界の海、地域の海

——化学成分からみた海洋水と沿岸水——

川 野 田実夫（大分大学）

地球のくぼみに水がたまって海ができている。海は科学的な見地からも、文学的な立場からも「生命の母」とみることができよう。

本講義では海水の主要化学成分である水、あるいは海水が豊富に溶存している主要化学成分について、海洋水と沿岸水とを対比して論じた後、太平洋表面海水中の二酸化炭素分圧と、九州（大分県）沿岸海水中の二酸化炭素分圧の測定結果を検討して、海洋水と沿岸水の化学的な質の違いについて考察する。

② 亜熱帯地域の自然環境

——サンゴ礁の発達史——

古 川 博 恭（琉球大学）

サンゴ礁は地球上における熱帯・亜熱帯地域の自然環境を代表するものの1つである。第四紀更新世末から完新世になって始めて出現した現世サンゴ礁は地球全体の気候変動・海面変動に規制されて発達したことを琉球列島における具体例で示す。

さらに、九州・本州などの温帯地域の自然環境との対比も行ない、その共通性と相違点を指摘する。この亜熱帯自然環境の変遷は琉球列島の文化史とも密接な関係があり、環シナ海地域のなかで特異な位置を占めていることを論述する。

③ 地域開発における工業立地の意義と限界

——福岡県下4市の経験から——

原 田 統之介（九州工業大学）

○はじめに（報告の狙い）

福岡県下では、福岡、久留米の両市が商業都市とイメージされているのに対して北九州、大牟田両市は工業都市とイメージされているが、第2次大戦後、とくに昭和40年以降についてみると前2市の発展と後2市の停滞がめだっている。

人口でみると、昭和40～45年期に大牟田市が久留米市に、昭和50～55年期には北九州市が福岡市に追い抜かれて、以後人口の格差は広がる一方である。このような結果を招いた要因としては、商業・サービス機能をはじめとする都市諸機能の集積の程度や周辺部との交通諸条件に規定される都市圏の広さ（そこに住む人口やそれらの人口が得ている所得など）や域内の諸産業の盛衰などが考えられるが工業に限っていえば、域内の工業のあり方、素材型か組立加工型か、巨大事業所中心型（いわゆる企業都市）か中小企業中心型か、本社機能や拠点機能（金融、営業、研究開発、企画、設計、情報等の）を有しているか否かなどが注目され、それがまた他産業とくに第3次産業への波及効果を大きく左右すると考えられる。

ここでは、これらの工業の諸側面を福岡県下4大市の歴史的な推移の中で捉え、地域の開発に資する工業立地のあり方を探る。

- 福岡県下4大市の概況（人口および産業の現況と動向）
- 4市製造業の中分類別・規模別構成の特徴
- 北九州、大牟田両市の基幹的事業所従事者数の推移
- 本社機能および拠点の営業機能の推移と商社、銀行広告業等の対応（新日鉄八幡を中心に）
- 下請型中小企業と自前型中小企業（企画、設計、研究開発、金融、営業等諸機能を中心に）
- 情報化の進展とテクノポリス（九州での意義と限界）
- まとめ—ブランチプラント型工業立地の限界と自前型中小企業の多様な展開の意義

④ 地方文学の発生

——日米における比較——

岡 林 稔（宮崎大学）

日本の昭和10年代は激動の時代であるが、この時代に地方を舞台とし主題とする文学が集中的に現われた。国家権力により弾圧を受けたプロレタリア文学作家が、生きのびる手段として「転向」したり、あるいは国家が富国の国策として農民文学を奨励したこともあった。

一方アメリカにおいては、南北戦争後、「地方色文学」が各地に現われ、アメリカ文学史上、ロマンチズムとリアリズム文学の橋渡しの役目をしたと評価されている。これは産業主義の進展による

文化の画一化に反抗した地方文化活動の一環であるとも考えられている。

本来の地方文化としての地方文学はどうあるべきかを、この日米両国の比較において考察する。

⑤ 地域と住宅

小 山 紘 三 (九州大学)

戦争による破壊のあと、日本は三十数年ものあいだ、住宅難（量の不足）にあえいできた。しかし現在では住宅問題は「質」の問題となったといわれている。

毎日大量に配られてくる不動産屋のチラシには、マンションや戸建住宅などの「便利さ」「自然環境」「広さ」などがうたわれている。そのチラシには地域による差はほとんどみられない。

戦前まで、住まいは地域により、それぞれ違った間取りをもち、さまざまな材料で建てられてきた。住まいは生産活動、仕事とともに風土と密接な関係をもっていた。

現在、住宅の「質」を問題とすると、その風土、地域性は考慮されなくてもよいものとなってきたのだろうか？

⑥ 魯迅における伝統と現実主義

高 橋 繁 樹 (佐賀大学)

魯迅（1881－1936）は中国近代を代表する思想家の一人である。魯迅の提起した問題は中国だけでなく、儒教を伝統精神とする日本およびアジア諸国において、今日なお考えねばならぬ重要な問題を含んでいる。二千年来ほとんど変革のもたらされなかった、「義」や「忠」や「孝」の「忠節」を説く封建社会の中にあって、魯迅はなぜそれらに疑問を持ち、反抗するようになったのか。「礼」を守り、「忠」に励んでおれば、必ず自己に実益をもたらす社会にあって、あえてそれらに反抗した動機は何であったのだろうか。その動機は異質の文化との接触によって生じたと考える。また魯迅の場合、他の知識人の場合と違って、接触して得た異質の文化をそのまま自国の社会変革に用いようとはしなかった。自国の伝統精神や習俗を厳密にとらえ、当時の社会、個人そして自分自身に対して、それらにどのように対処し、批判していくべきかを、厳しくそして妥協を完全に排する徹底した姿勢で要求したのであった。

⑦ 障害児とコミュニティ心理学

平 川 忠 敏（鹿児島大学）

本講義では、従来の臨床心理学とコミュニティの関係を述べることにする。

自閉症児や脳性小児麻痺の子どもや知恵おくれの子ども達の治療教育においては、彼ら個人へのアプローチと同時に環境への働きかけが重要になってくる。障害児自身だけを対象とするのではなく、親、兄弟、学級担任、児童相談所の職員やあるいは役所の窓口の人など、また地域の制度なども対象となってくる。

こういった環境への働きかけを、多くの学生ボランティアの協力を得て行っている自閉症児への治療教育を通して紹介したい。

また、障害児を支えているシステムが地域によってどのように異なるのかを症例にもとづいて紹介していきたい。

⑧ 地域方言と共通語

陣 内 正 敬（九州大学）

ことばは常に移ろいゆくものであるが、地域方言の変化には二重性が見られる。ひとつは共通語化と呼ばれる社会的・文化的圧力によるもの、もうひとつは内的変化と呼ばれる方言内に潜む方言自身のもつ論理から生じるものである。別の見方をすれば、地域方言は共通語の方へ一方的に収束する存在ではなく、例えば新方言と呼ばれるようなその方言独自の新語形を創り出してゆくバイタリティーに富むものである。こういった視点から地域の方言を考え、ひとつの方言観、言語観を紹介するのが本講のテーマである。各自が持っている自分の方言を上述の関心から観察してみることが宿題となろう。なお、参考図書Ⅳ章「方言コンプレックス」、Ⅴ章「方言から共通語へ」は特にしっかり読んで来てほしい。

○フォーラム 「地球の可能性を求めて」——沖縄の視点から——

『沖縄・奄美の動物相』

池 原 貞 雄（琉球大学）

日本列島は、動物地理区では旧北区と東洋区に位置している。両区の陸棲動物相の構成種が、大きく変化する境界が南西諸島にある。奄美以南の南西諸島の陸棲動物相は、南方型種が主な構成要素となっている。

南西諸島のおいたちと関連して、海を渡って移動できない動物のうちには、特定の島に限って分布している固有種が多い。これらの固有種の多くは、古い地層から成る島々に分布している。

この地域の陸棲動物のうちには、亜種に分けられているものが多い。その主因は、同種内の個体群が、海によって隔離された島々に生息したためと考えられる。

海域は黒潮の影響を受けて、サンゴ類の種多様性が高い。サンゴ礁の発達は、わが国では奄美以南の海域において顕著である。

環境容量の小さい島における大規模な自然開発は、島の陸棲動物ばかりでなく、沿岸海域の動物相の特徴を損うおそれがある。

『沖縄の地域開発と保全』

池 田 孝 之（琉球大学）

本土復帰より今日まで、沖縄では様々な振興開発事業が行なわれている。このプロジェクト中心の地域開発をトレースしながら、そのインパクトによって生じている問題を対比し、今後のゆくえを見定める。

他方、沖縄地域のアイデンティティにおいてもその追求の波は大きく広がっており、「沖縄らしさ」を、これら地域開発のもとで、どのように保全・継承していくのか、思考してみる。

1. 「振興」という名のプロジェクト主義

(1) 沖縄の地域基盤構造

(2) 開発プロジェクトのトレースとゆくえ

2. 「らしさ」と保全・継承

(1) らしさ：自然と人間

(2) らしさ：密度と象徴

(3) 保全・継承の視点

3. 沖縄型「保全開発」の展望

『近代日本と沖縄』

比屋根 照 夫（琉球大学）

本報告においては、近代日本と沖縄の歴史的・文化的な諸関係を通じて“沖縄”の位相が解明される。とりわけ、近代日本における“辺境”、“マイノリティー”としての“沖縄”の位置に焦点をあて、近代日本にとっての“沖縄”が何であったのかについて論及される。時期的には、琉球処分（明治12年）から第二次大戦における沖縄戦の諸相、更に戦後30年にも及ぶ米軍支配下の復帰運動の展開までを射程に入れながら“沖縄”の位置を解明する。“沖縄”を基軸にすることによって、セクショナリズムに落ちいることなく、近代日本をトータルに把握する視点とは何か、あるいは近代日本において“南”に開かれた地域としての“沖縄”と“アジア”との関係はいかにあるべきか—など考察されるべき課題は多い。本レポートは、こうした問題意識に立脚しながら“近代日本”と“沖縄”の諸関係を思想的に考察しようとするものである。

『復帰前夜の文学と思想』

川 満 信 一（沖縄タイムス）

復帰前夜の沖縄は激動する政治的季節のさ中であつた。沖縄中の関心はひたすら理想の祖国としての日本へ向けられていた。しかし、私の文学の主題は逆に失われてゆく島の時間と空間へのこだわりから、国家論や日本と沖縄の宗教の違いなどに広がっていった。当時の私は新聞記者であり、かたわら本土の月刊誌「中央公論」などに沖縄の状況論を書き散らしていた。同時に、地域の同人雑誌に身を寄せるしかない詩作者でもあつた。そのような私は自らの主体のうちにどのような亀裂を病んでいたのか。たしかに、その頃沖縄の文学活動は苦しい試練に立たされていた。

私の個人的体験を振り返り、自作詩の朗読をまじえながら、(1)反復帰論の思想的陰影、(2)失われてゆく島の時空間へのこだわり、などに触れ、戦後沖縄文学の典型的な主題のいくつかに照明をあてたい。

第11回九州地区国立大学間合宿共同授業参考書一覧表

○講義担当教官指定参考書（事前に入手し目を通しておくことが望ましいもの）

A コース

教 官	著 者	書 名	価 格	等
鈴木 亮	竹内 均、上田 誠也	「地球の科学」	N H K	ブ ッ ク ス
高橋 俊正	宮 村 忠 著	「水害—治水と水防の知恵—」	中 公	新 書
福島 邦夫	柳 田 国 男 著	「海上の道」	岩 波	文 庫
高田 和夫	坂 本 義 和 著	「暴力と平和」	朝 日 新 聞 社	選 書

B コース

川 野 田実夫	佐々木 忠 義 著	「海と人間」	岩 波	ジ ュ ニ ア 新 書	530 円
岡 林 稔	巖 谷 大 四 著	「懐かしき文士たち—昭和編—」	文 春	文 庫	420 円
平 川 忠 敏	吉 川 正 義 著	「ルポルタージュ 自閉症」	有 斐	関 新 書	600 円
陣 内 正 敬	柴 田 武 著	「日本の方言」	岩 波	新 書	430 円

フォーラム (A・B合同)

池 田 孝 之	木 原 啓 吉 著	「歴史的環境」	岩 波	書 店	430 円
川 満 信 一	大 江 健 三 郎 著	「沖繩ノート」	岩 波	新 書	480 円
	阿 波 根 昌 鴻 著	「米軍と農民」	岩 波	新 書	430 円

第11回九州地区国立大学間合宿共同授業参考書一覧表

○推薦参考書

A コース

教 官	著 者 名 ・ 書 名 ・ 価 格 等
崎 村 弘 文	外 間 守 善 著 「沖縄の言語史」 法 政 大 学 出 版 局 2,500 円
仲 程 昌 徳	仲 程 昌 徳 著 「沖縄近代詩史研究」 新 泉 社 6,000 円
高 橋 俊 正	富 山 和 子 著 「水の文化史」 文 芸 春 社 1,200 円
林 正 登	林 正 登 著 「炭坑の子ども・学校史」 葦 書 房 1,700 円

B コース

古 川 博 恭	木 崎 甲 子 郎 編 「琉球の自然史」 築 地 書 館 2,400 円
---------	--------------------------------------

フォーラム (A・B 合同)

池 原 貞 雄	木 崎 甲 子 郎 編 「琉球の自然史」 築 地 書 館 2,400 円
比屋根 照 夫	「アニメ、6月号、1986、No160 平凡社」[特集 沖縄の自然と動物] 比 屋 根 照 夫 著 「近代日本と伊波普猷」 三 一 書 房 760 円 比 屋 根 照 夫 著 「自由民権思想と沖縄」 研 究 社 3,800 円 松本三之介、比屋根照夫、他 著 「自由民権期の国家像」 岩 波 書 店 2,200 円 3,600 円

3. 第11回九州地区国立大学間合宿 共同授業を終えて

1. 総 括

オーガナイザー 弥 益 輝 文 (琉球大学)

今度の第11回合宿共同授業が、同じ九州地区とはいっても遠く数百軒海を距てた沖縄の、しかも離島、渡嘉敷島で実施されたことで、過去10回行われた共同授業とは可成り異ったかたちのものとなった。琉球大学は10年の間、常に参加するのみの側として主管校の九州大学教養部及び当番校の大学教養部の教職員の方々にオーガニゼーションと実施方をおまかせするばかりであった。参加する学生からは、夏期休暇中にまだ経験したことのない天草や九重の自然に親しむことができ、また他大学の教官の講義が受けられ、多くの大学の学生さん達との交流の機会も与えられるので喜ばれたものである。数年来本学教養部の総合科目のお世話をさせていただいている私にとっても、これまでの毎回は講師の推薦と参加学生の決定を授業実施スケジュールに合せてほぼお膳立通り行い、鹿児島行の船で送り出せば期間中ずっと参加職員にお願いし、後は無事終了帰沖の報告を受ければ良かったわけである。しかし、昨年11月の九州地区教養部長会議で共同授業10年後の区切りとして琉球大学が次回の当番校に決ってからは、従来の気楽さは一変した。

近年沖縄県内でもまた琉球大学内でも全国規模の学会や集会在次第に多く開かれるようにはなってきたが、本学教養部が主となって大規模の集りを催した経験はなく、200人を超える学生数の授業を合宿で行い得る施設も整っていないため、場所の選定にも問題点の1つがあった。幸いに事務部の骨折りによって那覇から30kmほど離れた渡嘉敷島にある国立青年の家で合宿期間中全施設を利用させていただくことに決りこの点は解決した。輸送の問題では陸上はともかく、海上については唯々好天であることに期待するほかいまし方がなく、過去10年間ともかく琉球大学から無事参加できたという好運に待つか、沖縄にやってくる台風が7月半ばには少ないという確率に賭けるばかりであった。

共同授業のメインテーマは当番校の地理的歴史的背景から“地域の視点から”とする提案をし、同じ地域にある各大学として共感を得たのであろうが、スムーズに賛同が得られた。フォーラム形式による講義については、従来ややもすると各講義の間に一貫性を持たせることが難しいくらいがあった点も考慮し、琉球大学にテーマの設定と講師の人選もおまかせいただいた。討議のアレンジから進行方法まで自由に選択させていただいたことは非常に有難いことであった。

案の条というか不徳の至りのせいというか、鹿児島出航の15日は九州方面は大雨、沖縄には台風8号接近の報となり、この日すでに離島渡しの船便は欠航した。共同授業第1日目に当たる7月16日に果して船は無事安謝港に接岸できるか、翌17日渡嘉敷島に渡船できるかどうかとも夕刻まで全く見通しが

つかなかった。幸いなことに台風の規模が小さく、低い緯度で転向して沖縄島から遠ざかってくれたことで、夕刻には次第に風雨がおさまった。台風の進路の前面を巧みに避けつつ本島西部近くまで迅速に接近していた船からは約1時間遅れで接岸するとの報も伝わり安心した。夕刻にははるばる海を越えてこられた各大学の皆さんの姿に接することができたわけである。17日には渡嘉敷島への船も出航できる見通しとなり、同日午後青年の家に到着できた。この間、授業日程の変更、船会社との折衝、放送局との連絡、本学学生、船中との連絡、青年の家との連絡調整等々、九州大学から先立って見えておられた副オーガナイザー安藤教授はじめ、本学職員の皆さんには非常なご苦勞をおかけしたが、当のオーガナイザーは唯うろうろするのみで誠に役立たずの感があった。この様なやむを得ない事態のため、講師としてご参加願った各大学の教官や事務処理で同行の職員の皆さんに、スケジュールの変更など種々ご迷惑をおかけすることになったが、以後は大きい混乱もなく共同授業、海洋研修、懇親会、沖縄南部めぐりまで、期間中に終了することができ本当に有難く思っている。

各授業の1コマ1コマについてはA B両コースともアレンジ、内容にわたってよく関連して、しかも充実したものであったといえよう。唯今回は1つのコースの学生数が100名を超えていたため、教室の広さに比して受講人数が多すぎ、盛夏の沖縄という気象的なこともあってか、受ける側にとっては多少身体的に厳しい条件であったかと感じた。今少し少人数を対象としたほうが講師の先生方としても良かったのではないかと反省している。

フォーラム形式による講義については本学の森田、鶴飼両氏にその進行をおねがいがしたが、事前数回にわたって講師の教官方にお集りいただいて討議や推稿もおねがいがいたおかげもあって、今回についてはおたがいに関連性のある充実したものになったと感じた。ただ、今少し受講者側からの自由闊達な発言と質疑や討論、問題提起などがほしかったことも感じた。日程の中間にこれを設定したことで、共に過した期間が短かく学生間の交流が充分でなくおたがいに十分リラックスしていなかったことによるかも知れない。

合宿共同授業は、参加した講師と学生が生活を共にしつつ講義や討議を通じて学習を進め、問題点や疑問点を時間をかけて明らかにし、将来の展望をさがすことができる点で非常に有意義だと考える。同時に多人数で生活する際に必要な他者への配慮を知ることも大切であろう。この点ではつくづく200人を超える大世帯に適切に対応することの難しさを感じた。

日程の都合で海洋研修の午前中の行事が短縮され、本学の学生にとってもまた沖縄の海に始めて接しようとする他大学の学生さんにとってはなおさら、待ち遠しく不満に感じられたことと思う。滞沖6年になる筆者のように常に海の生物を相手にしている者にとってもまだまだ見たこともない動物達がいくらでも眼の前に現われているほどなので、若い人はこれから何度でも来沖されてじっくり亜熱帯の海に親しんでいただきたいと思います。

終りに、この共同授業に参加下さった九州地区各大学の教養部職員の皆様、主管校の九州大学の立

田教養部長、安藤教授に対し、オーガナイザーの役をともかく無事に終えさせて下さったことについて深く感謝の念を捧げます。

2. 那覇に思う

——合宿共同授業のあと・さき——

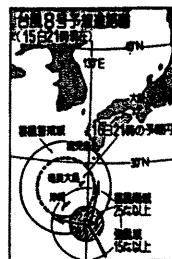
副オーガナイザー 安藤 延 男 (九州大学)

副オーガナイザーということで今回の合宿共同授業に参加した私は、九州からの船旅組より一足先に7月15日(火)の午後、空路那覇入りした。

それは、当番校の琉球大学教養部の方々となさっている合宿共同授業の準備に馳せ参じるため、とくに15日から渡嘉敷の国立青年の家に渡っておられるはずの琉球大学弥益教授と16日午前中に現地で合流して、九州と沖縄本島からの合宿共同授業参加者250人余りを出迎えるためであった。

ところが那覇空港についてみると、「その日の午前中に渡嘉敷島に渡るので他の教官が迎えに出る」との電話を事前に下さっていた弥益教授ご自身が出迎えて下さっておられるではないか。私の電話の聞きちがいったかとお尋ねするまえに、「台風8号の余波で今朝の便からもう離島行きの船が欠航しているのですよ」と弥益教授が説明してくれた。渡嘉敷島といえばたしかに離島ではある。しかし、那覇空港から西方指呼の間に横たわる慶良間列島との間の海は白い波頭が見えて台風の前ぶれを告げているとはいえ、ちゃんとした船が出てゆけないとは考えられない。「以前、台風の余波で客船事故があり、船会社がとても慎重なんですよ」という弥益教授のご説明をきいてようくなるほど」となってくしたものの、「この分では、台風が

本島けさから暴風圏の恐れ 台風8号



台風8号は、15日午後、沖縄県那覇市の南西に上陸し、16日午前、那覇市の北東に上陸した。この台風は、15日午後、沖縄県那覇市の南西に上陸し、16日午前、那覇市の北東に上陸した。この台風は、15日午後、沖縄県那覇市の南西に上陸し、16日午前、那覇市の北東に上陸した。

瞬間30ノットを予想

南大東島で24ノット記録



台風8号で暴風圏に入った那覇一帯の風景

S61. 7.16(水) 沖縄タイムス (朝刊)

最も接近する明日と明後日の船はどうなるのだろうか」と、すぐさま合宿共同授業の日程消化が不安になったものだ。

ひとまず那覇市の国際通りに近い八汐荘に旅装をとき台風情報をきく。台風は今夜から明日にかけて、沖縄本島に接近・上陸し、東方に方向を転換すること。早速主管校九州大学教養部に連絡をとった。案の条、立田教養部長がテレビの台風情報に一方ならず不安を覚えておられるとのことであった。

夕刻、今回の合宿共同授業の校長をつとめられる仲宗根琉球大学教養部長と弥益教授、それに私とで合宿共同授業の運営についての打合せならびに台風への対応策を練った。離島航路は明日の朝はもちろん、午後の船も出ないというのである。だとすれば、九州本島からの参加者が予定通り16日那覇に到着できたとしても那覇一泊は不可避となる。琉大の寄宿舎に泊めるか、あるいは琉球海運に船中泊の特別な取り計らい方をお願いするかなど、鳩首検討した。とにかく、琉球海運の情報では、船は予定通り鹿児島港を出て、沖縄に向っているとのことである。夜は零時すぎまで台風情報を見る。風はかなり強くなったようだ。

16日朝、ホテルの窓に吹きつける突風の音に目をさました。早速台風情報を見る。台風が沖縄本島のすぐ近くまで接近していて、沖縄本島の学校は臨時休校になると報じられていた。この分では、海上は相当の風波になっているにちがいない。九州本島からの船中にある教職員や学生の顔が目に見え、8時すぎに琉球海運本社に情報を求めた。船は奄美大島の西方海上を順調に航行中とのことである。船会社の人の応待が泰然としているのでほっとする。9時頃九大教養部に、船と台風の情報伝え、迎えにきて下さった弥益教授とともに風雨の中を琉球大学教養部に向かった。

琉大では、仲宗根教養部長と宮城事務長、教職員の方々が、そのままでも渡嘉敷に渡れる準備を整えて集合しておられた。この段階で那覇一泊は避けられないのみならず、最悪の場合は合宿共同授業の前半の日程くらいを琉球大学の施設を使ってでも実施せざるをえなくなる可能性も十分に出てきたのである。

宮城事務長は琉球海運の無線を介して、船中の九大鶴崎事務官から航行状態、船中の教職員・学生の様子などをきかれ、那覇ではさらに一晩船中泊になるなどのことも伝えられた。鶴崎氏の話によれば、船はエレベーターのように揺れ、船酔いの人も出ているが、概して元気だとのことである。私はこれをすぐに、九大教養部に知らせると同時に、今回の合宿共同授業に参加している九州の各国立大学にも同様のことを伝えてもらった。この段階で、琉大から参加する100名ばかりの人たちには、「今日中の渡嘉敷行は不可能、明日朝の出発も未定」と知らされる。正午ごろに教養部長室で昼食をいただく。風雨は強まるばかりである。明朝の離島船便は、ますますおぼつかなくなった。

しかし、17日朝の船便が出ないとなると、合宿共同授業の日程はさらに大幅な変更を余儀なくされてしまう。航路の安全は最優先されるべきであり、これは船会社の判断にまかされなければならない。

しかし、風波がおさまりさえすれば、朝の便を少々遅らせてでも出航させてほしいと願うのは人情というものである。とにかく離島航路の船会社に仲宗根、弥益、宮城、私の4人で状況の確認と明日以降の見通しの聴取に出向いた。台風が予想よりも早く右旋回にかかったこと、台風の吹きもどしはそれほど強くないと思われること、明日朝までには渡嘉敷航路は平静にもどると予想されることなどから、朝の第一便が定時に出港すると決まったときは、私たちは胸をなでおろしたものだ。

それから、那覇新港に一時間遅れで入港する琉球海運ゴーでん沖縄丸を迎えに車を走らせた。船のデッキに元気な顔が鈴なりである。かくて、全員沖縄本島に集結したのである。船酔いなどで、もう船中泊はご免だという人が続出するのではないかと私たちの出迎え組の思惑は全くの杞憂に終わった。早速、九大教養部にも連絡をとった。

ところで、17日朝の琉球大生の集合がスムーズにいくかどうか、残された問題となった。琉球大学当局では、事前に学生たちの連絡網をもうけて万全を期しておられたからそれ以上のことは不必要かと思われたが、たまたまNHK沖縄放送局に17日朝の那覇の泊（とり）港集合の時刻の件を、テレビとラジオで知らせて欲しい旨お願いしたところ快諾がえられた。お陰で、17日朝は全員揃って、昨日の台風が嘘のような静かな那覇港を定刻に後にすることができた。NHK沖縄放送局のご協力と井川局長のご好意に対し、心から御礼を申しあげる。

渡嘉敷島以後のことは、他の諸教官が書きしるしておられるので、ここでは7月15日と16日の2日間、台風の空の下で何を考え、何をしたかを書くだけにした。

私にとって今回の沖縄訪問は、復帰前の1969年のとき（40日間集中講義）を含め4回目になる。しかし真夏の沖縄はこれが初めてであった。空と海の「あおさ」は秋から冬の沖縄とは一味も二味も違っていたし、強烈な陽射しと台風までもが歓迎してくれたとあっては、これをよい旅と言わずして何と言おう。最終日（21日）の夜、琉球大学主催の教職員交歓会（市内ホテル）のあと知人の沖縄銀行久手堅頭取やNHK井川局長と旧交を温めた。さらに旧制中学同級生3人との30年余年ぶりの再会にも恵まれた。このうち2人は、太平洋戦争末期に九州在の私たちの中学に疎開してきていた友人であり、現在那覇市内の高級ホテルの社長やガス関係会社の代表取締役をしているし、もう1人は、私の村の小学校（当時は国民学校）から中学までの仲間某建設会社の沖縄支店長をつとめている。旧知、旧友との出会いは嬉しかったが、何しろあわただしい公務日程の中でのこと、一抹の未遂感をどうすることもできないでいる。

過去11回の九州地区国立大学間合宿共同授業のうち9回目の参加となった今回であるが、豊かな自然や人間との出会いを経験できて、私にとっては、学生たちに劣らず充実感にひたることのできた日々であった。

琉球大学をはじめ全参加大学の教職員の方々、学生諸君、渡嘉敷村民の方々、那覇での旧知・旧友の皆さんに厚く御礼を申しあげる。

3. フォーラムについて

(1) 燃えたフォーラム

森 田 孟 進（琉球大学）

今回のテーマ『地域の可能性を求めて』は、サブタイトルの「沖縄の視点から」が示しているように、共同授業が“沖縄”で開催されるということを強く意識して設定された。

沖縄は地理的にも歴史的にも日本の中で特異な位置を占めている——美しいサンゴ礁に囲まれた島々にはイリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナのような大変珍しい生物たちが棲息していること、離島であるゆえに独自の発達を見せた文化、近代日本の中央集権化と近代化過程における沖縄の位置、日本のどの地域にも見られない戦争体験と戦後体験——今回のフォーラムではそのような沖縄に大いにこだわることにしようというのである。結論を先取りして言えば、このテーマによってフォーラム会場は熱気につつまれ、企画者側の意図は満足のゆくていどに実現された、と言っても自画自讃に過ぎはしないであろう。

フォーラムの講師はこれまで通常2人であったが、今回は、自然系2人、人文社会系2人という異例の4人となった。はじめに各講師が約20分ずつ連続して講義を行い、ついで20分の休憩。この休憩時間に学生たちから各講師への質問・意見を記入したメモを回収。司会者たちはこれらのメモをもとに質問に立つ学生たちを指名した。この方法によって、フォーラムの最大の敵“沈黙”から容易に脱することができた（フォーラム全時間数3時間45分）。

各講師の熱のこもった講義は予め配布された「講義要旨」の枠をしばしば越えた。講義の特徴を次に紹介しよう（会場で配られた各講師のプロフィールも再録）。

池原貞雄先生（琉球大学名誉教授）

プロフィール： 沖縄の自然は、氏を抜きにしては語れない。戦後、琉球大学の創立と同時に同大学に招かれ、焦土に文字どおりゼロからスタートした大学で、教壇に立ってきた。生物学科にいて、氏のように植物から哺乳類まで教えた人は、そう多くないだろう。元琉球大学長

沖縄生物学会の設立に尽力したのも氏である。琉球列島の島々はことごとく歩いており、近年の開発が島の固有種の将来に与える影響を憂いながら、自然保護にも奔走している。

（★専門分野—動物生態学・『アニマ』1986年6月号による）

講 義『沖縄・奄美の動物相』

「私は沖縄に生まれ、沖縄に育ち、人生の大半を沖縄の動物たちとつきあうことで過ごしてきた。七

色に輝く美しいサンゴも、そこに棲む熱帯魚も、また東洋のガラパゴスと言われる沖縄の動物たちも、いつも身近かに見て暮らしてきたので、はじめのうちは特に珍らしいとも、不思議だとも思わなかった。ところが、イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナ、日本最大の甲虫ヤンバルテナガコガネ、ヤマガメ、ノグチゲラ、といった動物たちが沖縄を世界的に有名にしている」と、わかりやすく、格調の高い調子ではじめられた先生の講義は学生たちに深い感銘を与えた。

イリオモテヤマネコ、ノグチゲラ、ケラマジカなどの古いタイプの固有種が棲息しているのは西表、慶良間、沖縄本島のような高島（山のある島）であって、低島ではない。このことは琉球列島の形成史によって説明できる。すなわち、かつて琉球列島は大陸と陸続きであって、南から侵入してきた動物たちが多かったのである。琉球列島が島として孤立しつつも、これらの動物たちは生存に必要な自然条件（高い山など）に恵まれ、競争相手も少ないため、“生きた化石”として生き残ることができた。また、沖縄には亜種も多い。限られた環境の中で遺伝子の交配がなされると進化が遅れて、生きた化石や、亜種が生まれる（「私も、亜種になっているかも知れません。」と言って皆を笑わせる）。

バイオテクノロジーの研究、遺伝子交配の研究の場として、さまざまな珍らしい動物たちが自然の中で生きている沖縄は大変重要です。そういう沖縄の自然を人類の未来のために大切にしなければならない。

池田孝之先生（琉球大学助教授）

プロフィール： 昭和20年横浜市に生れる。東京都立大学大学院工学研究科博士課程（都市計画学）修了。工学博士。関東学院大学工学部建築学科講師を経て、琉大教養部助教授。琉大大学院でも「都市計画特講」を担当。専門は、都市計画、地域計画、都市・建築法制。

★論文として、『戦後沖縄都市計画の実際史に関する研究』、『亜熱帯都市の建築緑化とデザイン』、『子供による地区景観の評価とまちづくり』など多数。

講義『沖縄の地域開発と保全』

沖縄本島の著しい特徴は、軍用地が広大であること、市街化が激しいこと（浦添など）。また、那覇の街は実際には人口30万人にしかすぎないのに40万人の都市機能を備えている。すべて自前でまかなわなければならないという“島嶼性”ゆえである。那覇という街は通常の都市概念では切れない部分がある。

地域開発は計画性に乏しく個々ばらばらで、必要かどうかははっきりしない開発もある。戦後アメリカ軍による基地保有は皮肉にも沖縄の都市計画の財産となりつつある。すなわち、返還された基地、例えば天久の基地は大きな財産である。この財産は有効に生かされるべきである。例えば公園が不足しているので、緑の公園にするというような計画は重要な意味をもってくるであろう。

那覇市の公設市場は、人間の生活の迫力があふれているところである。このような市場は今日、日本では珍らしくなっている。観光客もこの市場に感動する。開発といっても人間不在の開発は無意味だ。人間の生活と調和させつつ資源を活用するプロジェクトが重要である。

比屋根照夫先生（琉球大学教授）

プロフィール： 1939年沖縄に生まれる。東京教育大学大学院修了。1973年、琉球大学に赴任現在に至る。この間、1984年4月から1985年4月まで国際交流基金の派遣で国立インドネシア大学文学部日本研究科で教鞭をとる。“沖縄”を基軸に日本の“近代”をとらえる作業を続けてきたが、近年は“アジア”と“日本”の近代化の諸問題に関心をむけている。

★著書に『近代日本と伊波普猷』（三一書房）、『自由民権思想と沖縄』（研文出版）、共編著に『近代日本の国家像』（岩波書店）、『自由民権機密探偵史料集』（三一書房）などがある。第13回伊波普猷賞受賞（1984年）、日本政治思想史専攻。

講義『近代日本と沖縄』

国立インドネシア大学で1年間日本の近代史、近代日本と沖縄との関わりなどを講義した経験によれば、インドネシアの学生たちは日本の歴史に生き生きとした関心をもっている。インドネシアでは、“歴史”は生きている。“歴史”は“実学”なのである。教訓として現実に実際に生かすことのできる学問なのだ。

我が日本では拝金主義、物量主義がのさばっていて、アジアの痛みを共有することを忘れていないか！

沖縄学の父・伊波普猷は、フィリピンにはじめて民族の概念を導入したホセ・リサールや中国の魯迅と同じ位置を占める思想家である。つまり、伊波はアジアの思想家たちと苦しみを共有した思想家である。伊波は近代日本の中央集権化を批判した。方言の使用を抑圧することは、その方言を話す地方人の“内面”を奪うものである、と言っている。もちろん伊波は日本の近代化過程における琉球方言の運命について考え、苦しんでいたのである。伊波の基本的な考えの一つは、“異なったものを承認すること”なのである。つまり、日本は単一文化の国にあらずして、複数の文化からなる国、文化的にゆるやかな国である、と伊波は考えていたのである。

川満信一先生（『沖縄タイムス』論説委員・詩人）

プロフィール： 1932年沖縄に生まれる。琉球大学在学中に『琉大文学』の創刊に参加、詩、評論で活躍。以後、マイノリティ文学と状況との凄惨なせめぎあいの中で自らの存在をかけつつ、沖縄自立の思想を模索し続けている。戦後沖縄の文学・思想を語る時、大城立裕・新川明氏らの

名とともに川満氏の仕事があげられる。わけても沖縄の若い人たちへの影響は著しい。

★著書に『川満信一詩集』（オリジナル企画）、『沖縄・根からの問い—共生への渴望』（泰流社）、『未来の縄文—沖縄自立の思想』（海風社、近刊）がある。なお、論文『民衆論—アジアの共生志向の模索』（『中央公論』1972年6月号）はフランスの代表的月刊紙“E S P R I T”（2・1973）に訳載された。

講義『復帰前夜の文学と思想』

「みなさんおとなしいですね。」と言うのが川満先生の第一声で、その講義は大学の教官でない者としての現代学生への観察から始められた。仏教の「三車のたとえ」（火宅の人）をあげながら、日本という国家の屋根の下で安心して育ってきている学生の皆さんはいったい何を手がかりとして、火事場の難をのがれるのかと、連日連夜の寝不足で疲れぎみの学生たちへ刺激的な一撃をまずはじめに加えた。

復帰後、確かに沖縄の開発は進んでいるが、人々が心の中で失ったものもまた大きい。復帰後も沖縄の人々の心の中では、「夜」は続いているのである。北方文化（ヤマト文化）がおし寄せてきたため、南方文化の人々の心は分裂し、いったいどこへいけばいいのかわからない状況になっている。このことが解決されないかぎり「沖縄の夜」は明けないのである。

近代の沖縄にとって、歴史的に、思想的に最も重要な事件の一つは沖縄戦である。沖縄戦の特異性は日本の中世の戦争と似ていることである。武士たちが村人たちを弾よけにしつつ戦うという戦争である。この慶良間島においても非戦闘員の集団自決があった。カマで親を殺し、こん棒で子を殴り殺し、1本の短い縄で20人ほどの人々がかわりばんこに首をつっている。なぜこういうことがおこったのか——(1)非戦闘員は足手まといになるから、(2)捕虜になるのがこわいから、(3)地理的空間が狭いため、逃げのびることができないから、(4)共同体の共生共死の思想、(5)忠君愛国の思想など、集団自決せよとの命令が軍からあったかどうかはいま別の問題として、この集団自決には10余の要因があげられる。

沖縄の戦争体験は沖縄で文学するものにとって最も本質的なテーマであるが、なかなか手に負えないというのが実状である。詩人の牧港篤三氏のように沖縄戦に30余年来こだわりつづけている詩人もいるが、文学的にはこれからの課題といってよい。

ここで、川満先生は戦争を素材とする自作の詩を朗読、ついで時間の制約もあって駆け足ではあったが復帰前夜の文学活動を紹介。戦後沖縄へのその証言は聴く者に鮮烈な印象を与えた。

以上四つの講義をめぐって、学生たちから次のような質問が出された。(1)琉球列島における動物たちの進化はどのようなものであったのか、(2)沖縄の自然保護は実際にはどのようになされているのか、

(3)沖縄学とか沖縄の特異性のことがしきりに強調されているが、沖縄を日本の他の県と同じ一地方とみなしてはいけなのか、(4)沖縄が復帰する時、沖縄の人々のほとんどは復帰を希望していたと思うが復帰に批判的な人々もいたのではないか。

これらの質問をめぐって先生方から丁寧で生き生きとした答えが返され、フォーラムは熱く燃えた。

最後に司会から次のような総括めいたことがつけ加えられた——現代の日本は「世界の中の日本」であることを自覚し、国際交流を最も重要な国家的方針のひとつとしているが、国際交流は自分たちが住んでいる地域の自然・文化を大切にすることからはじまる。たとえば、沖縄はイリオモテヤマネコやヤンバルクイナのような貴重な動物、本土とは別の文化（琉球舞踊、方言など）を持っているがゆえに世界の人々の注意をひくことができるのである。特異な地域性が国際性を持ちうるのである。国際交流のためにもまずは足下を耕すことが重要である。

熱く燃えたフォーラムの余燼は、その晩の「講義についての討議」においても、さらに夜更けては芝生の上で講師たちを囲む形で見られた。

(2) 学生の質問から

鵜飼 照喜（琉球大学）

四人の講師の報告が、(1)自然科学から見た沖縄の可能性、(2)人文、社会科学からみた沖縄の可能性という枠組で構成されていたことから、学生諸君の質問は池原、池田両講師に対しては自然保護と地域開発をどのように調和させ、あるいは両立させることができるかという内容のものが多く、一つの流れを作っていた。他方(2)については、川満、比屋根両講師の報告に触発されて、沖縄近代史の特質と沖縄戦に関する質問・意見がもう一つの流れを作っていたといえよう。

第一報告者の池原先生への質問では上記の質問・意見に関連し、開発にたいする自然保護の基本的な考え方を問い、あるいは沖縄における自然保護行政のあり方を問うものが中心であった。こうしたものを含めて「自然保護と開発」をめぐる議論が作り出されたと言えるが、さらに第二報告者の池田先生に対しては、琉球大学の学生からは最近完成した具体的な産業道路、現在工事中の自動車道路、計画中のモノレール、あるいは沖縄の観光化を自然保護との関連でどう評価するかという事例を挙げた質問が多かったのが一つの特徴であった。

また、(2)については川満先生が冒頭の刺激的な譬え話「火宅の人」に関して「すなおに」自分たちの姿勢をふりかえる学生が多かった半面、多少とも反発を感じて「こんな若者を作り出したのは大人の責任ではないのか」と問い返す学生も若干ながらみうけられ、大変興味ぶかった。

このような二分化の傾向は、量的には一方が多数で他方は極く少数というものの、沖縄戦に関する話の受けとめ方においても同様にみられた。かなりの学生が沖縄戦に関する参考図書を読んできており、そうした学生は「もっと沖縄戦について知りたい」という気持ちを強く抱いていることが汲みとれたし、また実際にそうした気持を素直に表明している学生も何人かみうけられた。あるいは、沖縄戦についてほとんど始めて話を聞く学生もかなりいたようで、その大部分はショックを受けたことが質問の内容からうかがい知ることができた。

他方、「戦争を知らない世代」として「戦争の悲惨さを知りたくない」と端的に言い切る学生も数少ないながらもいれば、さらに「危険を知らないで育ってきたというのなら、これから知ればいいとでもいうのですか」と正面切って居直る姿勢を示す意見もみられた。

けれども、これら少数派を否定的にみることは決して川満先生らの本意ではないであろう。「反発する心」こそ川満先生が求めたものではなかったか。ただし、その反発心を今後どのように展開させていくかは、我々に課せられた課題であろう。

第2の枠のもう一人比屋根講師の話に関する反応としては、「沖縄をあまり特殊であるかのように意識しすぎているのではないか」という問いが最も象徴的だと思われる。これについてはフォーラム後半の討議のなかで氏自身の政治学という専門の立場から詳しく、近代沖縄の特殊性を説明されている。はたして、学生諸君は氏の説明をどのように受けとめたであろうか。

九州地区国立大学同会福岡共同開催のフォーラム「地域の可能性を求めて」―飯塚市立青年の家

池原、池田先生の話が、自然のなかの人間を再認識させるものであったというのなら、川満、比屋根両氏の話は、歴史を学ぶ意味を問いかけたものであったといえるでしょう。このフォーラムでのインパクトが学生諸君の心の糧として何らかの形で生きていくことを期待したいものである。

最後に、学生諸君のなかから、四氏のレポートには直接関係はないが「日の丸、君が代問題」を問う数名の質問が見出されていたことを付記しておきたい。



九州12大学の共同授業
豊かさの中で
安逸むさぼるな
比屋根琉大教授が指摘

[illegible]

4. 参加講師による感想

授業のスタイルに工夫を

高 田 和 夫 (九州大学)

私の講義は最終回であった。学生諸君はそれまでの疲労からか聴講が随分とつらい様子であった。私自身、他の先生方の講義を幾つかのぞかせてもらったが、やはりそこでも状態は同じであった。日頃各大学で行なわれている様な室内での講義形式は教育効果を十分にあげていないことは明白である。

都会を離れ、自然の真中に入り、しかも他大学からの参加者に新しい友人を見つけ出す場で、つまり、日常とは全く異なる環境で、日常と同様なスタイルの授業をなすことは本来無理があるのではないか、ということは考えてみるに値する事柄のように思える。

そうした刺激的な環境に置かれた若者たちに騒ぐな、静かにしろ、早く寝ろ、酒をあまり飲むな、と言ってみたところで彼らはそれに従うほどおとなしくないのであり、要するに元気なのである。やおら、室内での授業時間は彼らにとり、絶好の休憩時間となり、そこで回復した精力をより魅力的な事柄に消費することになる。

言うまでもなく、合宿授業は2単位認定が可能な授業である。筆者自身、これを良い企画とみなし、存続すべきと思うが、改善すべき問題は大きい。学生諸君の自覚も当然だが、教官側も授業に工夫が要るのだろう。自然の中であって、室内でほとんどの時間を費すやり方は検討されるべきで、極力、戸外で行なえる授業形態を創り出す努力があってよい、と思える。室内でスライドを見せるよりもその方が学生の関心を引き、より大きな効果を期待しうと思うがいかがであろうか。

今回は沖縄の海に囲まれた素晴らしい条件にあったにも拘らず、「海洋研修」という名の海水浴は5泊6日して1回のみであった。学生諸君の欲求不満が日毎に高まっていくのが分かり、秘かに泳ぎに行く者が続出した。このことはかえって危険であった。書を捨てて、外へ出よ、とまでは言わないが、室外とのつき合いが積極化されてよいように思える。

ゆとりが欲しい

陣 内 正 敬 (九州大学)

まず感じたことは、前回の合宿授業報告書にも指摘されているが、授業の過密ぶりである。特に今

回は沖縄という九州本土の人間にはそう何度も行けないところで行われたことだし、授業という知的活動の他に美しい自然と戯れたり、沖縄事情を肌で感じることもできるような時間的余裕が欲しかったように思う。例えば3日間の授業の中日に午後いっぱい自由行動にして気分転換をはかるなどの必要性を感じた。授業や討議で朝から夕方までがなじがらめにされている分、明け方までの騒動に一層拍車がかかることになる。「学び」と「遊び」が本末転倒していると言ってみても、学生達の精神状態からすれば仕方のないことではないか。真青な海を前にしながら最終日にならないと正式には泳げないというのは何とも酷であった。この問題の解決には、合宿授業の単位認定のあり方やその方法を考え直す必要も感じる。今回単位認定の条件であるレポートがどの程度提出されたのかはよく知らないが、学生たちの参加の本音はただレポートを出して単位をもらえばいいというだけではないであろうから、何か他に満足できるものが得られればそれで十分意義があるのだと思う。

ところで私の個人的な反省点として、授業中にアンケートを取ったのだが、最終講義であったため「講義についての討議」がすぐ行われ、そのアンケートをもとに学生たちと話し合うことができなかった。「討議」に参加したのはほとんどが琉大生で、彼らと沖縄の言語事情について議論したが、アンケートに目を通す余裕があったら、もっとおもしろいものになったのではないかなと思う。

フォーラム「地球の可能性を求めて」が充実していた

原 田 統之介（九州工業大学）

琉大と九大の教職員の皆さんの大変な努力とゆき届いた配慮の中で、専門の異なる諸先生方の講義や意見を拝聴する機会に恵まれ、大いに啓発されました。工学系単科大学であるわが校の学生にとっても、多様な大学や学部の学生たちとの交流は大いに意義のある9日間だったと思います。

ただ、参加された教官の専門分野、問題意識の多様さのゆえにやむをえないことではありますが、メインテーマについての講師の対応がまちまちで、学生にどの程度浸透したかについては、かなり疑問が残りました。また、具体的な地域の現状や問題意識を通じて学習を深めるという姿勢がほとんどない教養課程の学生に今回のメインテーマがふさわしいものであったか否かについても、検討を要するのではないかと思います。私の担当部分にかんするかぎり講義についての討議も低調で、講義の2コマめという感じでした。

もっとも、「地域の可能性を求めて——沖縄の視点から」と題するフォーラムの企画は大変有意義だったと考えます。4人の講師が他の講師の主張を意識しながら発言されたために、沖縄の視点がかかり学生に浸透したと考えられるからです。講義でも、同一テーマで複数の講師が講義し争点を中心

に学生が参加できるような企画ができるとよいと考えます。

それにしても、琉大の学生も含めて参加学生の沖縄についての知識の不足がめだち、沖縄の自然、歴史等を概観できる参考書を指定すべきではなかったかと反省しています。

日程については、短期間で多く9講義を消化せねばなりませんので容易ではないと思いますが、早い時期に海洋研修の時間を設けた方がよかったのではないかと考えます。沖縄国立青年の家の研修日程は、多くの場合最初と最後に海洋研修が組まれているようすし、青く美しい海を眼下にみながら3日間も海へ行けないというのでは、学生の欲求不満も相当につのつたのではないかと想像されるからです。

合宿共同授業奮戦記

鈴木 亮（佐賀大学）

講師として以前参加した同僚から、自然科学の話が少ないという学生の感想があったことを聞いていた。理科の話は範囲に限られるから、統一テーマに沿ってということになるとどうしても少なくなってしまうのだろう。今回のメインテーマ「地域の視点から」にしても、地球科学や生物学の一部を除けばなかなか条件に合う話はないものである。自分は“地球物理学的に見た九州の特徴”と題して、“地域に”視点を“当てた”つもりである。

さて、ここに一つの難点がある。果たして今回の合宿授業のような多くの大学の学生からなる俄作りの、しかも理系・文系いっしょくたの集団に対して、いかにも自然科学らしい(?)数式の出てくるような話をじっくり聴かせるなんてことが可能であるか。自分はそれでも数式を書いた。ただし1つだけである。1つに止めておいてよかった。後で思ったことであるが、少くとも前もってある程度心の準備がないと、数式に対する拒絶反応が学生の側に起るようである。

致し方なかったことであるが、今回、自分に充てられた講義時間には決定的悪条件があった。というのも、台風の影響により出発後50時間余りしてたどり着き、ほとんど休む間もなく始まった最初の講義は、学生に緊張感よりも安堵感をもたらしたからである。自然科学の話にいっそう敬遠ムードを作ってしまった。

講義以外では学生達の討論会に積極的に参加し、学生達の率直な考えに接することができた。学生は概してまじめで、積極的に意見を述べる学生も多かった。また司会役を買って出る者もいた。そんな学生達を見ていて、共同授業は討論と交流を中心とする場として、授業や単位などいっそのことなしにしてもよいと思った。しかし、そんな学生達の中にも、ごく少数ながら、「一体こいつは一生涯

のうち真剣になるなんてことがあるのだろうか？」と懸念を感じさせるような者がいたのは非常に残念であった。

かくて、楽しい“奮戦”であった合宿共同授業をふり返って、あのきれいな海での海洋研修は我々講師にとっても得がたい経験であった。沖縄ならではの海辺での懇親会も実に思い出深い。殊に、時を同じくして起った火星の食は印象的であった。

九州地区大学間共同授業に参加して

—与えることだけでなく、学生諸君に自ら発見してもらうことを期待する—

福 島 邦 夫（長崎大学）

台風による大波に揺られ、また連日の睡眠不足の中での講義と悪条件に囲まれた中での合宿授業ではあったが、ふだんあまり交流のない学生諸君（留学生担当のため）や他大学の優れた魅力ある諸先生とも接することができ、自身にとっても大変有意義な時間であった。ただ一つの問題はスケジュールが過密すぎた（与えられているすぎた）ことで、通常の講義にフォーラム、海洋研修に見学旅行と短い日程にしては多くの内容があり、学生諸君にとってはなかなか消化しきれず終わった部分が多かったのではないかと危惧する。「せっかく、沖縄にまで来て通常の講義を聞かされるのはおもしろくない。」という学生諸君の感想を聞きながら、自身の力量不足とともに、もっと沖縄ということにテーマをしぼって何かできなかったかと反省している。

合宿授業というような形態において旅行の部分と授業の部分がうまく結びつくのは両者が有機的に関連するフィールドツアーの場合であろう。その意味で成功されていたのは琉球大学の諸先生によるフォーラム授業であったと思う。それにしても、実際に目で見える光景と話とが結びつく形をもっと追求すべきであった。又、管理という視点もあろうが、キャンプファイアー等は最初の準備から最後のかたづけ（一学生の意見もあったように）も含めて全部学生諸君に任せてもよかったと思う。生活全般をもっと自主的に運営させて見てはどうかと思った。多少の混乱はあろうが、その混乱の中から学ぶものも多いはずである。

そしてもっと外で学ぶもの、土地の自然や人々や社会にもう少し自由に接触して、自分で何か発見する機会があれば、とも思った。「大学間」共同授業と同時に「大学外」共同授業でもあるのだから。（「大学間」の方の成果は船中その他で充分あがったはずである。）

交流の中で感じたこと

高 橋 俊 正（熊本大学）

戦中派ではあるが、僅か2・3発の爆弾に見舞われただけの札幌に育った私にとって、第2次大戦とは話として聞いた異国の出来事に近い存在だったかもしれない。しかし、川崎先生の講義や南部戦跡めぐりによって、戦争のもつすさまじいまでの非人間的な現実が私の胸をえぐった。戦争を知らない年代の学生諸君の感想はいかなるものであろうか。

ところで、他大学の教官や学生との交流も合宿共同授業の目的の1つであろう。私自身も他大学の学生諸君と交流をもったし、学生諸君も深更まで交流を深めていたようで、そのこと自体は非常に結構なことと思う。しかし、朝の講義に遅刻し、あるいは出席しても居眠りをする者の多かった現実を見ると、手放しで喜んでばかりはいられない気がする。言うまでもなく、この行事の本来の目的はあくまでも「授業」である。それに支障をきたす交流ならば、明らかに行き過ぎであろう。

また、沖縄の美しい海で行なわれた海洋研修も、好天に恵まれたこともあって素晴らしかったが、ここでも「新人類」の集団生活への不適応を垣間見た。事前指導が徹底していた筈なのに、集合時間に遅れる。とくに、海洋研修最後の集合では、一部の人達がシャワーを使ったために15分も遅れた。この遅れは、もし事故があったら、救える筈の人間も助からなくなってしまう時間である。幸にも無事故だったものの、その時間中、他の大部分の人達は炎天下に居たのである。自分勝手な行為が他人にどのような迷惑をかけるかまで考えて行動してほしいと願ったのは私だけではない筈である。

ともあれ、行事自体は成功であった。学生諸君も通常の講義とは違う何物かをつかんで帰途についたことであろう。私自身、久しぶりに専門外の講義にふれたことは新鮮な刺激となった。最後に、地元琉球大学の、文字通り全教養部をあげての御尽力に深く感謝の意を表します。

沖縄での合宿共同授業に思う

岡 林 稔（宮崎大学）

初めての参加であったが、今回の合宿共同授業はその総合科目の特性を十分に活かした、学生諸君にとっては実りあるものだったと思う。「地域の可能性を求めて」—沖縄の視点から—と題するフォーラムによる視点の統一と集中に負うところが多いものであった。いやがうえにも沖縄の歴史、文化、自然に着目せざるを得ない地理的な利点をふまえた会場の設定と、琉大の先生方を中心にした講師陣の準備の周到さが評価されなければならない。

そのフォーラムの反応は詳しくは学生諸君のレポートによって確認したいが、最終日にその手ごた

えが十二分に感ぜられる場面があった。

最初は沖縄戦の何たるかをも知らない学生諸君だったように思った。知識はともかく、ある大学の先生の言葉を借りれば、我々が長い時間の隔たりの中で「西南の役」を実感する程度にしか、沖縄戦をその胸に受けとめていなかったようだった。それが最終日の南部戦跡めぐりの中で、彼らが摩文仁の丘の納骨堂の前に立ち黙想合掌するという場面を目撃することになった。それだけではなく帰りのバスや船の中で彼らの成長ぶりをその語らいの中に感知することもできた。

反省として残るのは、私を初めとして自分の講義とメインテーマをどれだけ有機的に関係づけられたかであるが、メインテーマを受けて各講師が講義の内容を考えるという手順を一考していただきたい。

各領域の専門家である先生方の講義を多角的に各自がとらえることも必要だが、なんといっても総合科目の重要なポイントは、さまざまな視点を一点に集中するフォーラムの在り方にあると思われるからである。

渡嘉敷合宿感想

崎 村 弘 文（鹿児島大学）

荒れ狂う台風にもめげず到着した学生多数を、直後の講義で沈没させてしまったことは実に残念でございましたが、全体を通して、大変楽しゅうございました。

九州の学生諸君も、初めて琉球を訪れ、〈ヤポネシア〉の歴史・文化の多様性に目覚めて、意義深く楽しかったのではないかと思います。海洋研修というのも初めての試みであったかと思いますが、なかなか良かったのではないのでしょうか。非常な海の美しさが、印象に残っております。

熱意をもってことに当られました琉球大学ならびに青年の家・渡嘉敷村当局の関係者の方々、大変であったと存じます。深く感謝致しております（特に、私の場合、せっかくの機会に当地で方言調査を行ないたいとの勝手を申しましたにも関わらず、手厚い御接待を頂き、忘れることができません）。

なお、今後のために考えておくべき事項は、ほとんど無いようにも思われるのですが、しいて幾つか挙げるならば、

- 1) 目的地到着までの日程は、天候の影響を考慮して、若干余裕を持たせておくことが必要かもしれない。
- 2) 強烈な太陽と広大な海洋にとろかされないよう、学生に、講義出席の重要性を十分認識させておく。
- 3) 末日の懇親会がスムーズに運ぶよう、照明・音声関係の機器を準備しておく。

といったところでしょうか。もっとも、いずれも、天地自然の在りように関わるところ大で、考えておいて直ちにどうこうできるといったことがらでないような気も致します。

こせこせせず悠々と事を運ぶのが、真夏の琉球にはふさわしく、内地ヤーにとってもたまさかの良い経験になりそうです。ともかくも、また機会が有りましたら、参加させて頂きたいと存じている次第です。

注) ついでながら御報告致します。方言調査第1日目は山開きの祭りがあって、御老人は皆不在。

どこへ行かれたかと尋ねて行った先のウタキ（社）で引っぱり出され踊って終わりました。戦跡巡りに同行できなかったのは残念ですが、こちらはこちらで、なかなか得難い経験でした。

（調査は、2日目に実施することができました）

ただ一日だけの参加から感じたこと

岡 本 恵 徳（琉球大学）

琉大教養部の仲程昌徳教授のいわばピンチヒッターとして急拠登場せざるをえなかった。従って、1日だけの参加であったから、感想といってもそれほど強いものは述べられない。しかし、1日だけであっても参加して良かったと思っている。

講義はウォームアップ不足で少し気になったが、学生諸君が多勢熱心に聴講してくれたのはありがたかった。爾後の感想でも、割合、つぼをえたものがあって、学生諸君の沖縄理解に少しは役だったか、と安心したり喜こんだりしている。沖縄だからなのかどうか（他の地域だったらどうなるのかわからないが）地元の琉大の学生の方に沖縄についての知識が乏しく、多くはそういう学生の方に役だったように思う。沖縄だから、というのではなく、各地の大学が、地元の歴史や文化をふまえたこういう講義を集中的に行ってみるのもよいではないか、という気がした。しかし、主催大学のエネルギーは大変的なもので、御苦勞さまでした、と特に事務の方々に御礼を言っておきたい。

第11回合宿共同授業に参加して

吉 井 巧 一（琉球大学）

合宿宿舎に着いてまずガッカリさせられた事は、そこが山の頂上であり、期待していた海の真横な

どではないという事であった。沖縄と言えばコバルトブルーの海であり、その海は山の上から眺めるためのものではなく、泳いだり、潜ったり、体で触れるためのものである。当然のごとく（?）、遙々九州からいわゆる臨海学校（夏期に臨海の地で、健康の増進、水泳訓練、その他特別の教育計画のもとに開設される教育施設／広辞苑）のつもりで参加したであろう学生諸君の中には、連日の有意義なる講義にも、フラストレーションを爆発させ、水着片手に、猛暑の山道を額に玉の汗を滴らせながら、脱出を敢行するものもすくなからずいたようである。かくして、夜は夜で酒瓶かついで展望台までハブ見物という（?）酔狂な輩の接待に疲労困ぱいぎみの生活指導班（私を含めて3名）は渡嘉敷山中に大捕物劇を展開する仕儀となったわけである。結論：次回（沖縄）宿舎はできるかぎり海辺に。講義は必要最小限にとどめ、実地研修・訓練を増やすこと。

大人数の衣食住全般を一週間以上にわたり遺漏なく調べ、所定の単位を認定し、なおかつ沖縄まで来たその意義を、強烈な太陽とともにしっかり胸に焼きつけ、無事帰っていただくという極めて厄介かつ困難な大仕事をやりとげられた他教の人々に感謝しつつ、敢えて苦言のペンをとりました。

海洋研修雑感

松 野 義 雄（琉球大学）

総勢218人の学生のエネルギーが、7月20日の「海洋研修」、「懇親会」、「キャンプファイヤー」に爆発することを想像しただけで、数少ないスタッフで「海洋研修」を無事終了させることが出来るだろうかと、大変不安であった。しかし、「青年の家」職員の絶大なる御支援と、ボランティアで御参加の有澤先生や関係者各位の御協力により、海洋研修が事故もなく終了出来たことは、担当者の一人として役目を果たした充実感と満足をおぼえた。皆様の御協力に対し厚くお礼を申しあげたい。

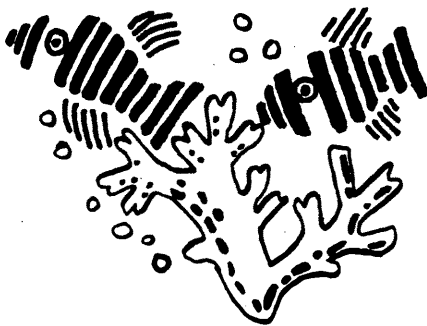
「海洋研修」が安全第1を目標に実施されることは勿論である。レクレーション的要素で日程に組まれているとはいえ、安全面、指導管理面、運営上から泳力別班編成となり、担当者の拘束に不満を感じた学生もいたにちがいない。その上、台風の影響による日程の変更は午前のハイキング、海浜レクの削除となり、盛り上がり欠けた「海洋研修」になった感じであった。ところが、引き続き催されたビーチでの「懇親会」「キャンプファイヤー」では、学生達が自主的に運営し素晴らしい盛り上がりをみせ、合宿共同授業も最高潮に達した感じであった。

今回の合宿共同授業は、会場が沖縄「国立青年の家」に決まり、そのためか例年より参加希望者が多かったと聞いている。さぞかし、参加学生の大半は「いつでも泳げる」と想像し、期待感にあふれていたのではないだろうか。某大学男子グループは「泳ぎたい」一念からか、いわゆる「ズル休み」

を利用し、それを計画実行したのである。ところが、彼等はビーチを眼下にみながら途中「補導」され、「単位」と「遊泳」の二者択一の判断を任せられ、やむなく引き返さざるを得ないことになったのである。なんと！、あの炎天下を徒歩で1時間もかけて実行したのに、である。さらに、女子グループにも同様なことがあると聞いて、二重の驚きとなった。彼女達はビーチまでの距離に脚力が及ばぬと思ったのか、渡嘉敷港近くの海岸で「水泳」ならぬ「水浴び」を楽しんでいたとのことであった。単位の認定はどうなることやら、結果が知りたいのは私一人ではあるまい。いずれにせよこのような行動は慎しむべきであるとは言っても、合宿共同授業参加者の動機的一端を示す事件であったことはまちがいない。

海洋研修日は大潮の干潮時にあたり、「ウニ」や「サンゴ礁」でのケガ人が続出した。泳力のない者にとっては、海は泳いで楽しむ所ではなくなり、「日光浴」「水浴び」の場となり、泳力不足を嘆いたにちがいない。反面、泳力に自信あるグループは、海中観察をしながらの小遠泳（約1 km）に参加し、渡ヶ志久の海をある程度満喫出来たにちがいない。惜しまれるのは、泳力が十分と判断されたにもかかわらず、小遠泳に参加しなかった人達である。因みに、研修前のアンケート調査によると、37人が1 km泳げると申告したにもかかわらず、小遠泳参加者は予想外の17人であった。プールで1 kmも泳げる者は、一般に行なわれる遠泳形式には自信を持って参加してもよいのではないかと考える。しかし、「海洋研修」が常に危険を伴うものであるという認識にたてば、無理は禁物である。泳力に自信をつけてから、海での遊泳は楽しんでもらいたいものである。

最後に、「海洋研修」がレクリエーション的位置づけにあったとはいえ、あまりにも参加者が多かったということである。担当者が少ないため、「海洋研修」を実施するには無謀であったと反省している。今後は海洋研修要員の充実が課題であり、当局の御配慮を期待したい。



4. 学生の評価

(1) 合宿共同授業に対する参加学生のアンケート回答 (最終日実施)

1. この共同授業に参加することを決めたきっかけは何ですか。

(1) 自分から進んで参加した。	77.1
(2) 友人(たち)にすすめられて参加した。	18.0
(3) 大学(教官・事務官)にすすめられて参加した。	4.9
	<hr/>
	100.0 (%)

2. この共同授業にどの程度期待していましたか。

(1) 非常に期待していた。	22.0
(2) かなり期待していた。	34.6
(3) ある程度期待していた。	35.1
(4) あまり期待していなかった。	8.3
	<hr/>
	100.0 (%)

3. この共同授業を終ろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。

(1) 非常に満足している。	17.1
(2) かなり満足している。	48.8
(3) やや不満である。	28.3
(4) 全く不満足だ。	5.3
(5) 記入なし	0.5
	<hr/>
	100.0(%)
	<hr/>

注： 参加者数 218名(内女子 74名)

回答者数 205名(内女子 72名) 回答率 94%

(2) 参加学生の感想

〔文科1年・男子〕

まず講義を聴いてみて“地域”という概念が文・理系の各分野によりわずかに異なっているような気がし、改めて“地域”を追究することの難しさを実感しました。また“地域”を主題とした都市開発における自然保護の問題や、文化の伝播など、いろいろな講義を聴くことができ、有意義な一週間を過ごせました。

今回の合宿共同授業の体験を十分生かして、これからはまず機会あるごとにもっと教養を身につけ、自分なりに“地域”に対する概念をある程度具体的に定義づけた上で、自分の専門とする分野から“地域”をじっくり研究していきたいと思います。

最後に琉球大学を始め各大学の、貴重な講義をして下さった先生や事務の方々に心から御礼を申し上げます。

〔文科1年・男子〕

鹿児島から22時間の船旅の後、台風の去った那覇の港に到着した。台風の影響で、船は上下左右に揺れ、陸に上がった後でも、体はフワフワ、頭はクラクラ。「青い海と輝く太陽」の期待に反して、出迎えてくれたのは台風であったが、何はともあれ、無事に着いた。翌朝、渡嘉敷島に渡り、いよいよ合宿共同授業が始まった。

今回の合宿共同授業は「地域の視点から」というメインテーマの下で進められた。そこで、私が沖縄という地域の視点から見てきたものについて述べていきたいと思う。沖縄で見たもので一番大きなものは、「沖縄（おきなわ）」であった。「沖縄」の人のたどってきた複雑な歴史、様々な地理的条件によってはぐくまれた独特な文化、米軍用機の爆音が今だに聞こえる現在の状況、これらの数々は多くの講義で聞くことができ、また実際に目で見ることでもできた。私自身、「沖縄」という地域を特に強調すべきではないと考える。しかし、この「沖縄」が私に多くの問題を提起してくれたのはまぎれもない事実である。

渡嘉敷の海はとてもきれいだった。水中ではさんごの周りを青や黄色の小さな熱帯魚が泳ぎ、海の青さには吸い込まれそうであった。最後の夜は、ファイヤーを囲み、皆で歌い、踊った。濃紺の空では、月と火星が火星食の天体ショーを繰り広げ、宇宙の雄大さに皆が歓声をあげた。大学の枠を越え、互いの交流を深めた。この夜のことは一生忘れることはない。多くの友人と、自分の将来、人生、そして夢を語り合い、相手を見つめ、自分自身を見つめ直す機会を得た。

沖縄で見たもの、それは宇宙であり、地球であり、日本であり、「沖縄」であり、自然の素晴らしさ、いろいろな人、そして自分である。とにかく、目や耳をはじめとする体全体で感じたすべてのものが、私が沖縄で見たものである。日常とは異なった環境での、新しい発見、そして何よりも、自分自身ではないところの自分自身に少しだけではあるが近づき得たような気持ちだ。合宿共同授業というより、人生を含む「旅」のおもしろさに触れることができた。土産の泡盛はもう無いけれど、心の中の土産だけはいつまでも残っている。

〔文科1年・女子〕

沖縄での合宿では、大勢の仲間が、何を考え、どんな目的を持って学んでいるかを知ることができたのが、最も大きな収穫であったと思う。

自由討議や課外での話し合いは、真剣そのものだった。その外、印象に残ったものとして、フォーラムがある。沖縄の生物・都市計画・文学・歴史分野の知識を得た上で、沖縄のことを考えることができ、先生方の講義内容も相互につながりがあり、沖縄についての貴重な知識を増やすことができた。沖縄のことを知ったからには、「平和」のことを考えずにはいられなかった。沖縄戦の悲劇・日本への復帰問題、米軍基地など、私たちには想像もつかないことを経験している沖縄の地で、平和の重要性を痛感した。

これから先も、沖縄だけではなく、世界中のあらゆる所の戦争の悲劇を知り、国際平和を考えていかなければならないと思った。

〔理科2年・女子〕

今回の合宿共同授業への参加は「2単位」と「沖縄」に魅かれてのこと、講義について大して準備もせずに、ごく安易に渡嘉敷島へと行きました。着いてすぐに、ほとんど予備知識も得ないまま来てしまったことを後悔する有様でした。けれども自然の風景については目に映るままに感じ、感動しました。特に海の美しさはとても口で表わせるものではありません。

1つ1つが輝くように美しい自然とは裏腹に、沖縄本島だけでなく、私達の居た渡嘉敷島にも、石ころのように戦時中の悲話が転がっていました。それは人の口から語られたり、活字だったりしましたが、決まってそれは淡々と語られました。最終日の南部戦跡めぐりでは、底抜けに明るい日射しの中に立つ慰霊碑が無言のうちに穏やかに語りかけて来るような気さえしました。

そういった暗く深い歴史をもつ沖縄、生物の宝庫としての沖縄、都市開発の渦中にある沖縄など、沖縄の様々な側面について知り、考える機会を与えてくれた「フォーラム形式の講義」（第2日目）はとても有意義でした。願わくば、もっと時間をかけて話を聞き、質問や意見をしたかったものを…。

「沖縄」を考えることから出発して、他大学の先生や学生の方々と、生き方や価値観あるいはそれ

それぞれの目ざすものについて語りあうことができました。泡盛を飲み、消灯後の暗い中で仲間たちと夢中になって語りあったことは一生の思い出となるでしょう。

仲間達と沖縄は私を大きくゆさぶりました。はっきりと言葉にはならないけれど、私の価値観や考え方を変えて行かなければ、と思いました。私は事あるごとに合宿での出来事や風景を思い出し、咀嚼し、そこから得るものを懸命に消化しようとしています。あの経験を食欲に消化しようとしています。

欲を言えば、せっかくのすばらしい自然の中での合宿なのですから、講義等もたまには外で行うなど、もっと余裕をもてたら、と思います。講義中、外の空と南国特有の海をうらめしく眺めたこともありました。

最後に、この機会を提供して下さった方々、お世話して下さい方々、そして合宿に参加した仲間たちに心から感謝いたします。

〔理科2年・男子〕

7月15日、合宿共同授業に向けて九州の各大学から、そしてさまざまな学部の学生が鹿児島新港に集まった。そんな私たちを待ち受けていたのは長い船旅であった。しかも台風で船は大きく揺れ、気分が悪くなった学生も多かったが、翌日、130余名の学生は無事、沖縄に着いた。

そこにはマリングルーの海、膚につき刺さらんばかりの日ざしなど、私たちが目にする物すべてに南国の息吹が感じられた。

そんな自然の中、合宿共同授業は沖縄本島から少し離れた渡嘉敷島で行われた。

講義は、「地域の視点から」というメインテーマを基調として、各大学諸先生方の専門分野を中心に「地域」とのかかわりについて進められた。私たちは先生方の講義に圧倒され、私語をする学生もなく、真剣に聞き入っていた。

講義では、質問をする時間が少なかったため、「講義についての討議」の時間に活発な意見交換がなされた。中には時間を延長して討議がなされたところもあったようだ。

また講義とは別に、今回特別に「海洋研修」の講座が設けられていたが、そこで沖縄の自然とのふれ合いを満喫できた。

合宿することで、講義以外の時間に他大学の多くの学生といろんな話題について討議し、ふだん接する機会の少ない先生方と夜おそくまで話しができたことは貴重な体験であった。また、個々人の行動によって団体行動が大きく左右されるということも痛感した。

この貴重な体験を今後の生活において、いかに生かすか、これが今回の合宿共同授業で私たちに課せられた宿題であろう。

最後に、この場をかりて、今回の合宿共同授業について御心配頂いた先生方に感謝を申し上げたい。

5. 参 加 者 名 簿

① 教 職 員

	熊 本 大 学	助 教 授 国 吉 正 之
	教 授 高 橋 俊 正	“ 浜 元 盛 正
福 岡 教 育 大 学	教 務 係 長 古 家 寛	“ 山 里 勝 己
教 授 岩 城 正 彦	大 分 大 学	“ 池 田 孝 之
“ 林 正 登	助 教 授 川 野 田 実 夫	“ 屋 良 和 子
九 州 大 学	事 務 官 結 城 智 己	講 師 吉 井 巧 一
教 養 部 長 立 田 清 朗	宮 崎 大 学	“ 松 野 義 雄
教 授 安 藤 延 男	助 教 授 岡 林 稔	“ 宮 元 章 次
助 教 授 小 山 紘 三	宮 崎 医 科 大 学	助 手 高 倉 実
“ 高 田 和 夫	教 務 係 長 橋 口 悟	事 務 長 宮 城 敏 明
“ 陣 内 正 敬	鹿 児 島 大 学	庶 務 係 長 田 場 盛 順
事 務 官 鶴 崎 修 平	助 教 授 平 川 忠 敏	学 務 係 長 宮 城 朝 教
“ 三 浦 洋	“ 崎 村 弘 文	事 務 官 比 嘉 光 治
九 州 芸 術 工 科 大 学	事 務 官 前 原 正 俊	“ 下 野 茂
助 教 授 三 上 禮 次	琉 球 大 学	“ 上 原 秀 盛
九 州 工 業 大 学	教 養 部 長 仲 宗 根 勇	“ 伊 集 盛 仁
教 授 原 田 統 之 介	教 授 弥 益 輝 文	“ 湧 川 均
佐 賀 大 学	“ 池 田 交 優	“ 与 那 城 咲 子
助 教 授 鈴 木 亮	“ 古 川 博 恭	“ 上 原 葉 子
“ 高 橋 繁 樹	“ 森 田 孟 進	名 譽 教 授 池 原 貞 雄
事 務 官 関 久 瑞 峰	“ 鶴 飼 照 喜	フルブ ライター フイトニー
“ 角 正 秀	“ 比 屋 根 照 夫	ゲ ス ト 有 澤 芳 子
長 崎 大 学	“ 岡 本 恵 徳	沖 縄 タイ ム ス 社
講 師 福 島 邦 夫		論 説 委 員 川 満 信 一
事 務 官 濱 村 博		

② 学 生

(Aコース)

福岡教育大学 (5名)

- 1 林 道 宏(教)
- 2 山 口 幸 子(教)
- 3 西 直 美(教)
- 4 藤 原 七帆子(教)
- 5 吉 竹 美 穂(教)

九州大学 (15名)

- 1 田 中 智 章(経済)
- 2 中 野 剛(経済)
- 3 中 山 峰 之(経済)
- 4 作 間 新 一(経済)
- 5 福 田 暢 英(工)
- 6 馬 場 徳 尚(理)
- 7 岸 本 堅 剛(理)
- 8 広 中 清 人(薬)
- 9 藤 川 康 浩(薬)
- 10 津 山 泰 彦(歯)
- 11 緒 方 善 行(法)
- 12 大 西 智 和(文)
- 13 亀之園 弘 幸(工)
- 14 佐 藤 智 子(経済)
- 15 赤 坂 和 泉(理)

九州芸術工科大学 (5名)

- 1 寺 田 一 教(芸工)
- 2 松 尾 貴 史(芸工)
- 3 井 上 弘 之(芸工)
- 4 長 谷 俊 和(芸工)
- 5 山 中 英 実(芸工)

九州工業大学 (1名)

- 1 高 見 直 宏(工)

佐 賀 大 学 (14名)

- 1 戸 田 均(理工)
- 2 湯 川 雅 史(理工)
- 3 今 道 公 利(教)
- 4 村 田 浩 志(農)
- 5 江 島 明 男(理工)
- 6 堀 内 賢 治(経済)
- 7 末 松 敏 行(理工)
- 8 中 西 康 博(農)
- 9 杉 谷 重 文(経済)
- 10 大 塩 文 隆(経済)
- 11 木 宮 直 樹(理工)
- 12 村 田 充(経済)
- 13 水 野 秋 子(理工)
- 14 成 富 利佳子(理工)

長 崎 大 学 (11名)

- 1 釘 尾 修 一(経済)
- 2 大 村 真一郎(工)
- 3 坂 田 信 秀(工)
- 4 佐 藤 慎 二(経済)
- 5 諸 石 聡(工)
- 6 渡 辺 邦 好(工)
- 7 森 洋(水産)
- 8 寺 崎 俊 憲(歯)
- 9 大 淵 一 郎(工)
- 10 伊 東 朝 子(工)
- 11 鈴 木 裕 子(教)

熊 本 大 学 (7名)

- 1 荒 川 敏 明(文)
- 2 古 莊 哲 生(法)
- 3 真 野 恵 司(工)
- 4 山 添 裕 司(法)

5 川 上 し の ぶ(法)

6 西 原 順 子(文)

7 村 山 千 明(教)

宮 崎 大 学 (2名)

- 1 渡 辺 勝 美(教)
- 2 龍 神 裕美子(教)

宮崎医科大学 (2名)

- 1 東 隆 行(医)
- 2 藤 本 徹(医)

鹿 児 島 大 学 (15名)

- 1 下 村 真 哉(法文)
- 2 川 崎 淳 一(理)
- 3 矢 崎 忠(工)
- 4 峯 崎 春 洋(工)
- 5 安 永 誠(理)
- 6 黒 木 穰 二(理)
- 7 栗 山 斉 昭(工)
- 8 木 塚 大 成(農)
- 9 高 屋 繁 樹(水産)
- 10 上川床 真 二(水産)
- 11 徳 田 忠 久(水産)
- 12 落 治(工)
- 13 木 原 朋 子(教)
- 14 松 村 雅 子(法文)
- 15 星 野 雅 江(法文)

琉 球 大 学 (35名)

- 1 永 江 和 輝(法文)
- 2 大 塚 雅 治(法文)
- 3 小 倉 真佐雄(法文)
- 4 富 村 真(理)
- 5 名嘉真 朝 靖(理)
- 6 井 上 雄 二(理)

7 具志堅 剛(理)	17 牟田 龍生(農)	27 安藤 泰代(教)
8 葉内 満(医)	18 赤嶺 光宏(農)	28 村原 美佳(教)
9 赤嶺 文繁(工)	19 池原 健一(農)	29 黒木 美智江(教)
10 高良 尚樹(工)	20 山城 あゆみ(法文)	30 座間味 真利恵(教)
11 照屋 雅彦(工)	21 山城 睦子(法文)	31 平良 選子(教)
12 東江 栄(農)	22 狩俣 明子(法文)	32 多和田 一美(教)
13 竹内 崇(農)	23 諸喜田 杉子(法文)	33 野原 靖子(教)
14 棚橋 恵(農)	24 仲田 京子(法文)	34 宮城 裕子(教)
15 當山 直伸(農)	25 崎山 美保(教)	35 與儀 輝代(教)
16 戸田 世嗣(農)	26 永田 深香(教)	

(Bコース)

九州大学 (15名)

1 楊 憲 勲(医)
2 廣渡 淳(工)
3 前園 健司(工)
4 西牟田 洋一(工)
5 谷口 誠一(理)
6 五百路 裕之(文)
7 曾里田 幸典(工)
8 吉次 昌則(農)
9 木戸 守(理)
10 吉田 一郎(医)
11 吉村 亜希子(農)
12 萩谷 まり(教)
13 井上 尚子(理)
14 小野田 裕子(理)
15 蓮尾 まゆみ(農)

九州芸術工科大学 (5名)

1 鶴田 康光(芸工)
2 田内 英二(芸工)

3 永沢 裕之(芸工)

4 阿部 眞理(芸工)

5 西村 明(芸工)

九州工業大学 (1名)

1 泉原 兵庫(工)

佐賀大学 (15名)

1 末次 弘治(理工)

2 副枝 哲哉(経済)

3 徳久 極(理工)

4 佐伯 一光(理工)

5 田中 宏季(経済)

6 平城 英俊(経済)

7 松長 栄治(理工)

8 石橋 誠(農)

9 川野 聡(経済)

10 野田 儒史(農)

11 有馬 義明(教)

12 西山 吉継(理工)

13 坂田 雅雪(農)

14 高庄 陽子(教)

15 前田 直子(教)

熊本大学 (8名)

1 空閑 孝文(工)

2 河中 功一(医)

3 野本 淳哉(理)

4 山下 雅美(教)

5 田中 達朗(医)

6 松下 豊弘(工)

7 木下 澄仁(医)

8 徳丸 由紀子(文)

大分大学 (11名)

1 佐藤 功二郎(教)

2 竹井 寛(教)

3 後藤 伸二(工)

4 神田 倫臣(工)

5 林 伸一(工)

6 藤原 吉幸(工)

7 伊藤 峰子(教)

8 辻 野 智 恵(教)	琉 球 大 学 (39名)	20 糸 嶺 智 子(法文)
9 田 代 淳 子(教)	1 大 門 貴 司(法文)	21 比 嘉 ゆかり(法文)
10 工 藤 千 恵(教)	2 屋 宜 宣 章(法文)	22 安次富 葉 子(法文)
11 重 松 裕 子(経済)	3 平 野 正 人(法文)	23 長 嶺 泰 江(法文)
	4 金 城 力(法文)	24 仲 村 百 代(法文)
宮 崎 大 学 (3名)	5 前 田 英 明(教)	25 仲宗根 英 子(法文)
1 和 田 恭 子(農)	6 岡 村 真(理)	26 大 田 悦 子(法文)
2 渡 邊 寛 子(農)	7 嘉 数 修(理)	27 石 渡 康 美(法文)
3 武 藤 裕 子(農)	8 知 花 博 治(理)	28 前 堂 志 乃(法文)
	9 平 良 正 哉(理)	29 吉 田 博 子(法文)
鹿 児 島 大 学 (9名)	10 今 井 良 松(理)	30 上運天 尚 子(教)
1 富 吉 宏 治(法文)	11 西 丸 松 美(理)	31 喜友名 めぐみ(教)
2 福 本 武 信(法文)	12 長谷川 征 彦(理)	32 城 間 直 子(教)
3 堀之内 勇(法文)	13 大 塚 康 久(医)	33 久木原 美 和(教)
4 胡摩ヶ野 秀雄(法文)	14 久 力 権(医)	34 阿波根 陽 子(教)
5 武 富 泰 毅(法文)	15 横 山 朋 弘(医)	35 親 泊 千賀子(教)
6 湯 浅 峰 志(法文)	16 安慶名 一 樹(工)	36 柴 田 久美子(教)
7 植 木 千 晴(法文)	17 與 儀 成 也(工)	37 桂 寧 美(農)
8 尾 上 由美子(法文)	18 大 城 和 久(農)	38 仲 松 悦 子(農)
9 村 山 弘 美(法文)	19 海老原 歩(農)	39 春 田 由 里(農)

6. 付 録

(1) 第11回九州地区国立大学間合宿共同授業事務日程

年 月 日	事 項	内 容
60. 11. 7～ 8	合宿共同授業委員会	九州地区国立大学教養部長会議
11. 18	企画委員会開催通知	
12. 12	企画委員会開催	
12. 25	講師推薦について通知	
61. 2. 10	合宿共同授業経費（予算要求）について通知	
2. 17	講師決定について通知	
4 月上旬	予算要求書の提出	
3. 12	合宿共同授業実施委員会開催通知	
4. 18	合宿共同授業実施委員会開催	
5. 1	実施（学生募集等）について通知	
5. 31	参加者名簿の提出締切	
7. 16～21	実 施	

付録(2)

第111回 九州地区国立大学間合宿共同授業 日程表 (当初計画分)

Aコース

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
第一日目	7月15日(火)	(ごーでんおきなわ) 船中オリエンテーション 乗船 鹿島新港 18:00 出港														
第二日目	7月16日(水)	船中 那覇(新港) 移動(バス) 移動(

付録(2)

第11回 九州地区国立大学間合宿共同授業 日程表 (当初計画分)

Bコース

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
												乗船 鹿島新港合	乗船 船中オリエンテーション (ごーでんおきなわ)					
7月15日(火) 第一日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	講義(1) 「世界の海、地域成分の海(化学汚染水と沿岸水)」 大分大川野教官	休憩	講義(2) 「亜熱帯地域の自然環境(サンゴ礁の発達史)」 琉大 古川教官	昼食	講義(3) 「地域開発における工業立地の意義と限界」 九工大原田教官	移動(バス) 那覇(安新)港	移動(バス) 船中(第一けら丸)	移動(バス) 受入 オリエンテーション 打合せ	夕食	入浴	夕べのつどい	交流会	自由	消灯・就寝		
7月16日(水) 第二日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	講義(1) 「世界の海、地域成分の海(化学汚染水と沿岸水)」 大分大川野教官	休憩	講義(2) 「亜熱帯地域の自然環境(サンゴ礁の発達史)」 琉大 古川教官	昼食	講義(3) 「地域開発における工業立地の意義と限界」 九工大原田教官	移動(バス) 那覇(安新)港	移動(バス) 船中(第一けら丸)	移動(バス) 受入 オリエンテーション 打合せ	夕食	入浴	夕べのつどい	交流会	自由	消灯・就寝		
7月17日(木) 第三日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	講義(1) 「世界の海、地域成分の海(化学汚染水と沿岸水)」 大分大川野教官	休憩	講義(2) 「亜熱帯地域の自然環境(サンゴ礁の発達史)」 琉大 古川教官	昼食	講義(3) 「地域開発における工業立地の意義と限界」 九工大原田教官	移動(バス) 那覇(安新)港	移動(バス) 船中(第一けら丸)	移動(バス) 受入 オリエンテーション 打合せ	夕食	入浴	夕べのつどい	交流会	自由	消灯・就寝		
7月18日(金) 第四日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	講義(5) 「地域と住宅」 九大 小山教官	休憩	自由討議	昼食	フォーラム形式による講義(A・B合同) 「地域の可能性を求めて(沖縄の視点から)」 基調発題者: 琉大 池原教官, 琉大 比屋良教官, 琉大 タイムス川瀬教官, 琉大 森田教官, 琉大 鶴岡教官 司会者: 琉大 森田教官	移動(バス) 那覇(安新)港	移動(バス) 船中(第一けら丸)	移動(バス) 受入 オリエンテーション 打合せ	夕食	入浴	夕べのつどい	交流会	自由	消灯・就寝		
7月19日(土) 第五日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	講義(7) 「障害児とコミュニケーション」 鹿大 平川教官	休憩	講義(8) 「地域方言と共通語」 九大 陣内教官	昼食	講義について の討議Ⅱ	移動(バス) 那覇(安新)港	移動(バス) 船中(第一けら丸)	移動(バス) 受入 オリエンテーション 打合せ	夕食	入浴	夕べのつどい	交流会	自由	消灯・就寝		
7月20日(日) 第六日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	海 洋 研 修 (スポーツ、レクリエーション) 一 往路は徒歩一 (ハイキング)														移動(バス)	消灯・就寝
7月21日(月) 第七日目	朝のつどい 起床・洗面	朝食	全体討議	清掃	移動(バス)	船中(第一けら丸)	見 学 (南部戦跡めぐり)	着 那覇(安新)港				入浴	懇 親 会 (キャンプブファアィヤー)	移動(バス)	船 中 泊			
7月22日(火) 第八日目	乗 船 10:00 出 港 (ごーでんおきなわ) 船 中																	
7月23日(水) 第九日目	船 中	鹿 児 島 新 港 7:30																